

「所で、私が手工に就てはあまり意を用ゆべきではないと云ふ時にも、だからと云つて私は藝術家が手工に就ては何にも知らずにあると云ふわけではない。その反對に、自分の知つてゐる事を隠す爲め、藝術家は充分なる技巧を體得してゐる必要がある。疑ふまでもなく普通人にとつては、^ま的を外れた線の華かさを表はしたり、驚く程な色彩の花火を造らへ上げたり、役にも立たない言葉で飾り立てた長つたらしい文章を造る手品師を、世にも巧みな男だと云ふ風に思つてゐる。けれども藝術の最頂點に位ひする最も困難な^事ことと云ふのは、物を易しく單純に素描する事であり、描く事であり書く事である。



『君が畫を見たり本を讀んだりする際、素畫にも色彩にも亦文體にも氣が付かずに、只君が心から動かされたとすれば、何の誤りもなくその素畫、色彩、乃至文體は技巧として完備してゐるのです。』

『先生、いくら立派な傑作にも技巧の欠點がないことはないでせう。例へばラファエルの色はよく汚ないの、レムブラントの素畫には非難すべき所がある等と人が云ひますが、』

『そんな事はない。私をお信じなさい。ラファエルの傑作が若し人を喜ばせるなら、色彩にせよ素畫にせよ畫の中にある凡てのものが、

相寄つて見る人に與へる効果を強めてゐるのです。ルーヴルにある小さい「セント・ジョージ」、ヴライカンにある「バルナス」又はサウス・ケンシントンにある毛氈の畫稿を見て見玉へ。これ等の作品に見る調和には人の心を魅する力がある。サンチオの色彩はレムブランドのとは趣きを異にしてゐるけれども、彼の靈感にはすつかり當てはまつてゐる。明くて光澤があり、キビキビした花の様な喜びに満ちた調子を持つてゐる。そしてラファエル獨得な永遠の若々しさを持つてゐます。それは着實を欠いてゐる様にも思へる、けれどもその理由はウルビノの大家に依つて觀察された眞理が、純粹に物質的のものではなかつた爲めです。彼の眞理は感情の世

界にあるのです。その世界にあつては、形體も色彩も共に愛の光りに依つて淨化されてゐる。きつと正道を外れてゐる寫實家達は、この色を見て不正な物とも云ふだらうが、詩人はこれの正しい事を認めるのです。

「レムブランドやルーベンスの色がラファエルの素畫に結び付いたら、それは確しかにおかしなもので不愉快になる。同様にレムブランドの素畫はラファエルのとは違つてゐる、と云つてそれよりも悪いではありません。ラファエルの線は氣持よく純で、レムブランドのは多くの場合頑丈で角ばつてゐる。偉大な和蘭人の眼は、着物の凹凸や老人の皺寄つた顔、又は賤民の硬ばつた手足に捕らへら

れてゐる。レムブランドにとつて、美とはつまり肉體の外皮に見る平凡さと内にある光りとの並び立つてゐると云ふそれに他ならぬのです。若し彼がラファエルに楯ついてやさしさの點で力を比べやうとしたら、どうして見かけは汚なく然かも道徳的に偉大な所のあるものからあの美しさを表現する事が出来たらう。彼の素畫は絶対に彼の要求する所と相應じてゐる。その上から、彼の素畫の完全してゐることを人は認めなければいけない。』

『すると、貴君のお考へに従へば一人の藝術家が同時に優れた色彩家でありまた優れた素描家である事は出来ないと思はれるのは誤り

ですか。』

『その通りです。で私には何故こんな考へが執念深く根を張つてゐたのか、又今も何故さう人が認めてゐるか、それがわかりません。大家達が我々に話をしかけたり、我々を自分の方へ連れて行かうとする以上、彼等が自分に要する所のあらゆる表現手段を所有してゐる事はよく解る。私は今それをラファエルとレムブランドの場合に就て君に證明しました。この同じ證明はあらゆる大藝術家に就て云ふことが出来ます。例へばドゥラクロアは素畫が下手と云ふので貶されてゐる。が、事實はその反對であつて、彼の素畫は驚

く可きまでその色彩と結び付いてゐるのです。でそれも亦色彩と
同じく劇烈で、熱病的で、調子の高い所があり、生氣と熱情とに
満ち／＼してゐる。そしてある時には矢張り色彩同様狂つてゐる、
でこれが一番その美しく見える時なのです。誰れしも色彩と素畫
とをばなして賞讃することは出来ない、何故と云つてこの二つは
全く一つなのですから。

『自分から間違へて只一つ素畫に流派、例へばラファエル流の素畫だ
けを、認めてゐる半可通があるけれど、それはラファエル其の人に
感心してゐるのではなくつて、その模倣者ダヴィッド、アングル等に
感心してゐるのです。實際ならば、藝術家のゐる数だけ素畫乃至色



彩の種類がある可きなのです。

『アルブレヒト・ドゥレルの色彩は、堅く乾いたものだと言はれてゐる。全然そんなことはない。が、彼は獨乙人です、それで獨乙人らしく物を取扱ふのです。彼の構圖は論理の組立を見る様に正しく、彼の描く人物は要素的なタイプとでも云ふ様に堅くなつてゐる。それが彼の素描を飽くまで細密にし、色彩を極めて差控へたものとする所以です。

『ホルバインも同じ流派に屬してゐる。彼の素畫には少しもフロレンス派に見る様な秀美の點が無く、その色彩にもダニエリス派の持つてゐる様なチャームは少しも見當りません。けれども彼の線や色彩

には力があり莊重な所があり、内面に或る意味が含まれてゐる。云ふ迄もなくそれは他の誰にも認めることの出来ないものなのです。

『一般に、今私の擧げて注意した様な藝術家達には或る特殊な素畫が結び付いてゐ、色彩に就ても數學の眞理の様に冷やかな所があると云ふことが出來ます。それに反して、心の詩人とも云ふ可き他の藝術家、即ちラファエルなりコレッチオなりアンドレア・デル・サルトなりになると、線にはすつとやさし味があり、色彩も餘程温和になつてゐます。その他我々の「寫實家」と呼ぶ藝術家、云ひ代へれば感受性の以上に表面に現はれてゐる藝術家達の場合には、例

へばルーベンスなりゴラスケスなりレムブランドなりに見れば、力と落付きとのある線は生き／＼した魅力を持ち、色彩は或場合日光の盛んな力に融け入つたり又或場合には烟霧の中に消へ入つたりしてゐる。

『かう云ふ風に、天才ある人々の表現方法はその人達の心の違ふ様にそれぞれ違つてゐるのです。で、彼等に就て或者の素畫なり色彩なりは他の或者のよりは秀れてゐるの劣つてゐるのとは、云ふ事が出來ないのです。』

『よく解りました。が、先生は藝術家を素描家だの色彩家だのと云

ふ風にして分類することを退けながらも、それで貴君がどんなに可哀想な批評家を悩ませてゐるか、それを思ふのをお止めにはなりません。幸ひ貴君のお言葉の中に、分類好きの人達は新らしい分類の方法を見付け出せると云ふ様な氣が自分にするのです。色彩と素畫とが唯一の手段である、そして藝術家の心を知るのが重要なことであると、貴君はお云ひです。すると藝術家は、その各々の性情に従つて一纏めにされる可き筈です。例へばアルブレヒト・ドゥレルとホルバインとは、——共に論法家である。貴君の一所に名をお舉げになつたラファエルとコレツヂオとアンドレア・デル・サルトとは、情調の卓越してゐる一派を形成します。悲歌を唱

ふ人達の第一列にあるのです。もう一派は活動的な生存、日常生活に興味を持つてゐる大家達に依つて組織されます。ルーベンスとゼラスケス及びレムブランド、此の三幅對はその一番上座に位してゐる。又、クロード・ローランやターナーと云つた様な、自然を一の光輝あり浮んでは消へて行く幻想の組織體と考へてゐた藝術家は、相寄つて第四の一團を組み立てるわけです』
ロダンは微笑を浮べて云つた。

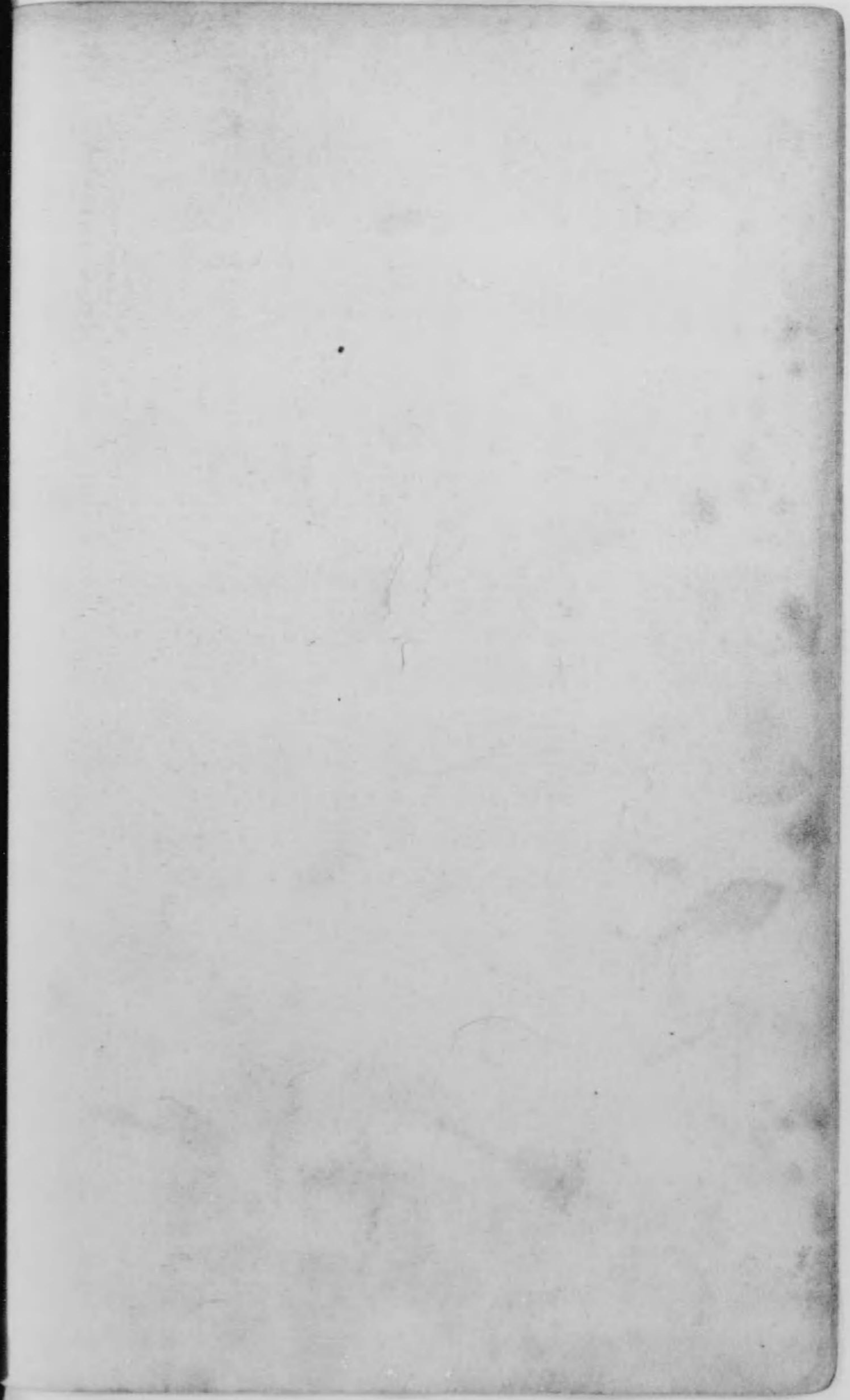
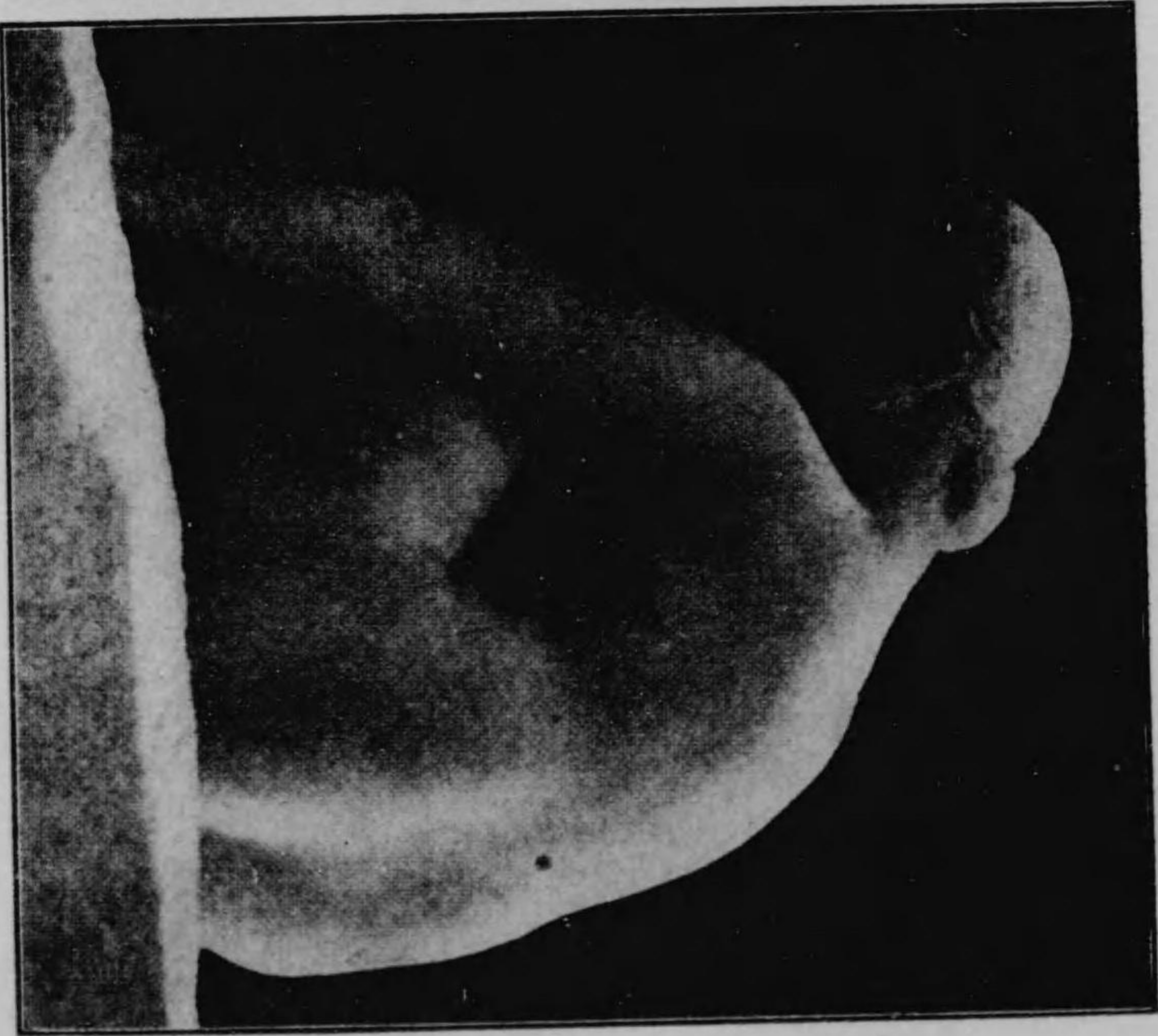
『さう云ふ分類をするには頭腦わたまがなくつてはなりません。で、色彩家と素描家とを分類すると云つたやり方よりも、ずつと正しいことになるでせう。』

『何は兎もあれ、錯綜してゐる藝術、と云ふよりも藝術を言語としてゐる人達の心なのですから、あらゆる分類法も骨折損になり易い。全くレムブランドも時には崇高な詩人となり、ラファエルも力強い寫實家となるのです。』

『お互ひに大家達を理解する様にと——彼等を愛敬して——努めませう。彼等の下へ靈感を求めに行かうではありませんか。けれども薬屋の店にある薬品の様にして、彼等を區分けすること等は止めにするのです。』

第六章

婦人の美



第六章

婦人の美

巴里市街、静かなセーヌ左岸の街にあつて、つい以前迄尼達の修道院であつた美事な古い建物、『ロデル・ド・ピロン』として知られてゐる家は、婦人會の勢力範圍に入つて以來、數多間借りの人々に占められてゐるが、その中にロダンも交つてゐる。

既に我々も知つてゐる通り、先生は此の他^{ほか}ムードンにも亦巴里の大理^{デボデマルブル}石庫にも工房を持つてゐるが、分けても此所は氣に入つてゐ

るのだ。

權勢ある一家族の共々に住む家として十八世紀に建てられたもので、確かに藝術家ならば誰しも住居として好適と思ふ程善美を極めてゐる。大きな室は天井も高く、白と金との美しい模様付きに白く塗り込められてゐる。ロダンの制作してゐる室は圓屋で、高い佛蘭西風の窓が美しい花園へと開いてゐる。

何年と云ふ事なく此の花園は手も入れられないでゐた。が、今も歩を運ぶ事は出来る。騒がしいばかりな雑草の間に小徑の縁を取つてゐる昔の區切りになつてゐた線は、異様な蔓の下にある緑色の四目垣にした樹木へと道を追ふてゐる。そして春毎に、花壇の草々を

押しつけて花は咲き返るのだ。襲ひ寄る大自然の手の下に段々と人工の削除されてゐる此の有様にも増して、快美なる憂鬱を誘ひ起すものは他にない。

ロダンの旅館にあつて、ロダンは大抵の時間を素描に過してゐる。

此の静かな隠れ家に只一人ゐて、氏は自分を畫用紙と何枚とも知れぬ鉛筆のスケッチ、及びモデル達の示す優秀な姿とに委ねる事を愛してゐるのだ。

或る夕、予も氏と共にゐて此等習作の幾セリーかを見、且氏が紙上にあらゆる人體のリズムを呼び出す調子の好い線條を讚嘆してゐる。

た。

軽く紙上に觸れて走り出すアウトラインは、運動の火花やその奔放な氣持を呼び起し、氏の拇指にこすられると淡い陰影から肉つきモデリングの迷はす程な調子が描き出される。氏が素描に耽つてゐる時には、恰かも再び心の裡にそれこそ形の本源である多くのモデルを見つめてゐる様に見える。氏は斷へ間なく感嘆の聲をあげてゐる。

『此の肩は如何でせう、何と云ふ美しさ！實に點の打ち様もない美の曲線です。私の素描では餘り重苦しくなつてゐる。無論やつては見るんですが、然し——。これを御らんなさい、矢張り同じ女から描いた二度目の試作です。かなり此の方が前のより行かうと

する所へ近よつてはゐますが、未だ未だ物足りません。

『それから此の咽喉のどを見て御らんなさい。ふつくらしてゐる線の拜みたい位な美しさは如何でせう。殆んど手も届かない程な優美が含まれてゐるではありませんか。』

『好いモデルはわけもなく見付かるでせうか。』と予は尋ねた。

『え、見付かります。』

『すると佛蘭西にも美人はさう少くないのですか。』

『少ないとは云へません。』

『先生はかうお考へにはなりませんか。古代の美は今の美よりも數

等優れてゐる、そして今日の女はあのフィディアスの前に立つた女に比べては比較にもならない位劣つてゐる、とさうお思ひではありませんか。』

『そんな事は到底ありません。』

『けれども希臘のギナスが整ひ盡してゐるのは……』

『それはかうです。その當時の藝術家はみんな見る可きものを見ることの出来る眼を持つてゐた、然も今日の藝術家達は盲ひてゐる、それが種々の相違の出て来る元なのです。希臘の女が美しかつたことは疑ひも入れませんが、その美と云ふのも、つまりはそれを刻んだ彫刻家達の心に生き返つてゐたのです。』

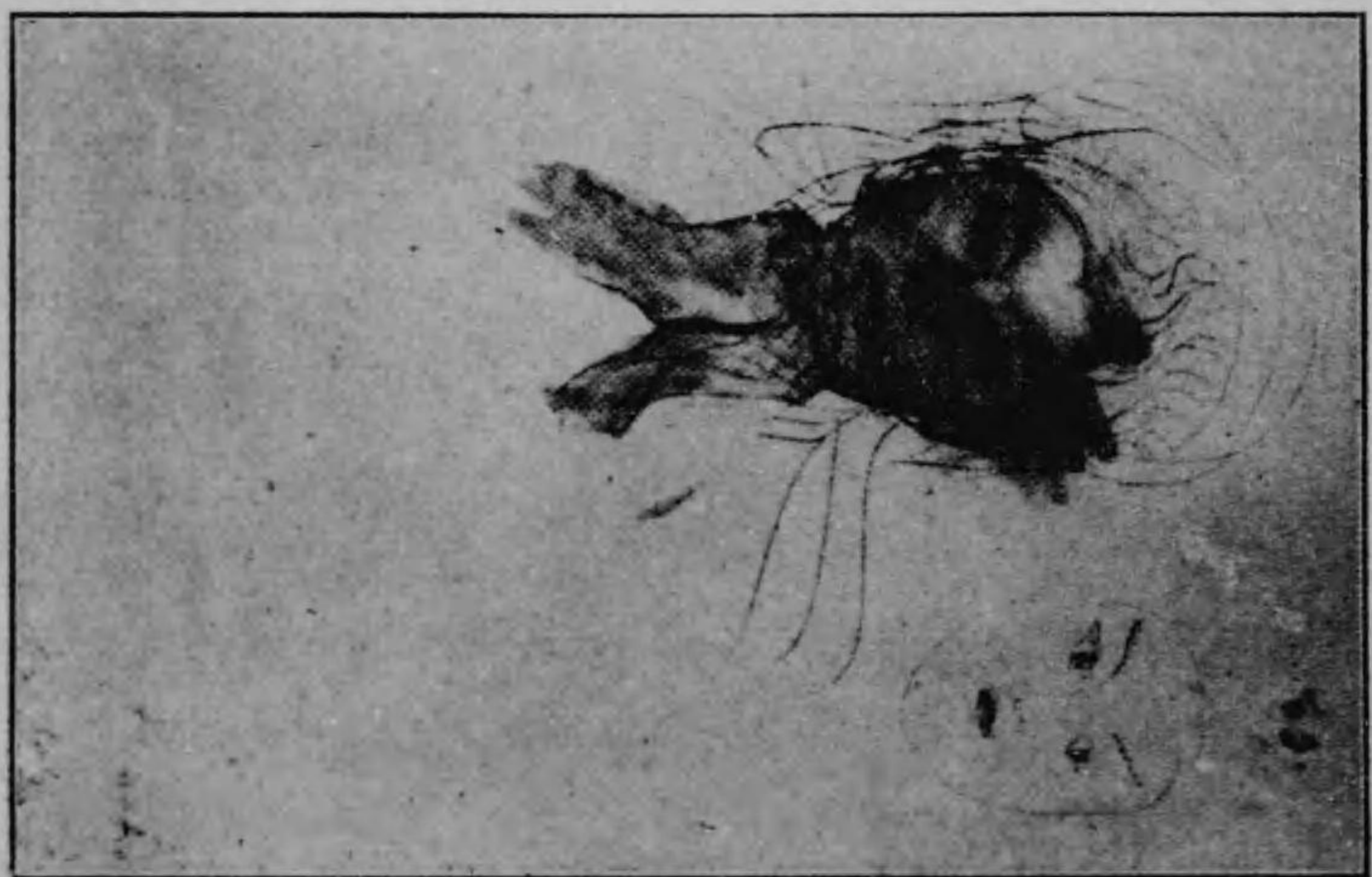
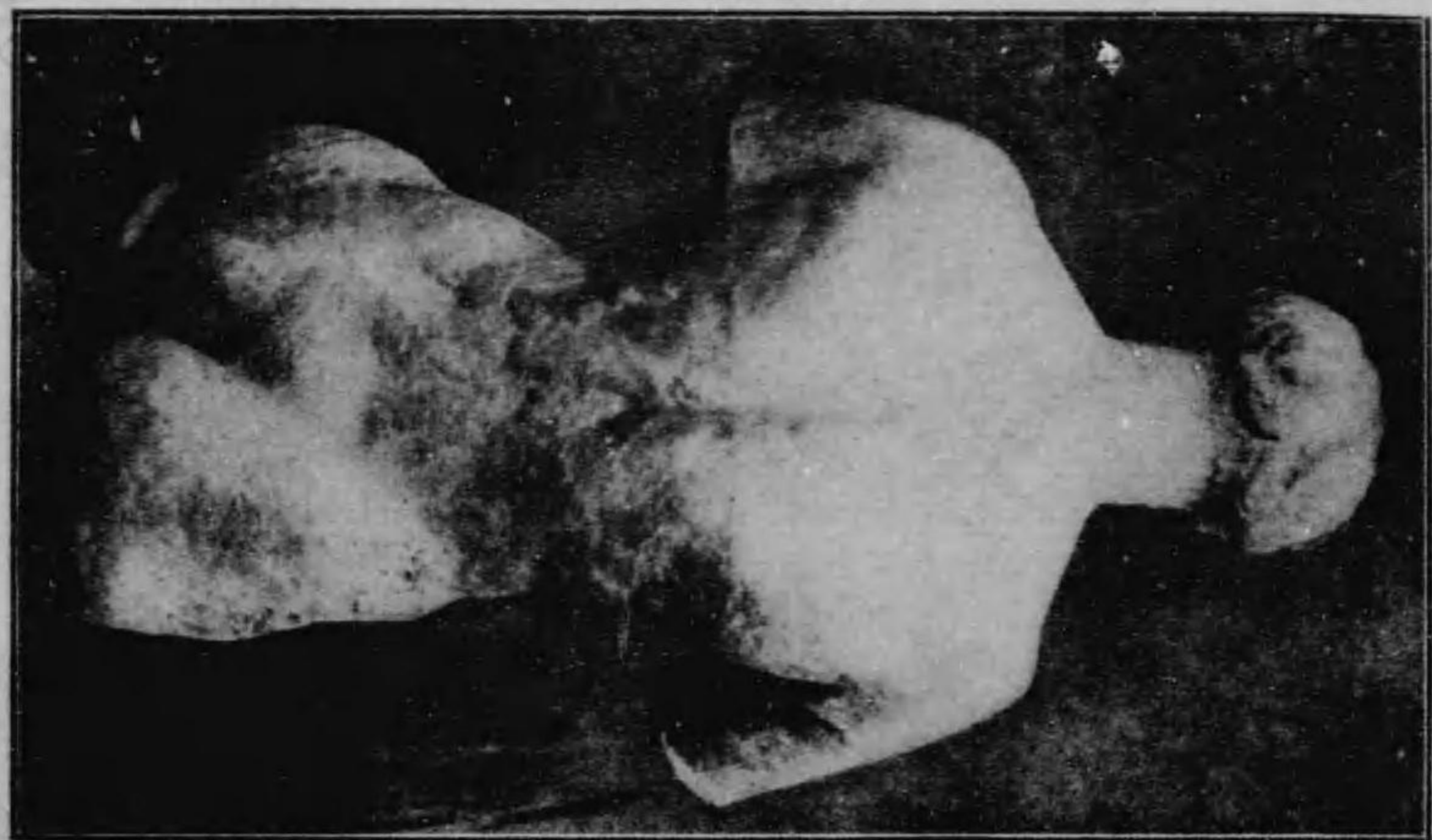
『今日でも、希臘の女達に負けを取らない位な婦人はあります、主に南歐に多い様です。例へば近代伊太利の女等は、フィディアスがモデルとした地中海民族と同じタイプに屬してゐるのです。このタイプの特徴と云へば、臀部と肩との幅がおんなじのことです。』

『蠻人が侵略して來た爲め、人種混合に依つて古代美の尺度が害はれはしませんでしたらうか。』

『そんなこともないでせう。例へば蠻族が地中海民族に比べて美しくないとしても、亦釣合がとれてゐないとしても、時と云ふものは血液の混和から生じた汚點を拭い去つて、再び古代形式の調和を作り出す可き筈のものです。美と醜とが混合することとして、その

時最後の勝利を得るものはいつも美なものです。犯し難い法則に依つて、大自然は斷へず休みなく最も善きものへ、完全なるものへと向つてゐる。地中海民族の形式の他に、尙北方人種型が存在してゐますが、佛蘭西の多くの婦人、それと獨乙、スラヴの人種型はそれに屬してゐます。

此のタイプで見ると臀部は非常に發達してゐて、比較的肩は狭まくなつてゐる。その構造はつまり、デヤングージョンのニムフだのワトリーの「巴里の判決」にあるギーナス、又はウードンの月神ダイヤナに見るものです。此のタイプでは、又胸が概して高くなつてゐるが、古代型や地中海民族型に見る胸部は反對に眞直ぐになつてゐます。



事實、どの人間のタイプもどの人種もその美を持つてゐるのです。問題はそれを見出すと否とにある。私は量り知れぬ程な興味を以つて、小さいカムボディアの踊り子が持つてゐる、他には求められないものを線で描きました。近頃巴里へ来た者ですが、その優雅な四肢の美しい細やかな仕草は、異様な驚くばかりな美を持つてゐました。

『また私は日本の女優花子の習作もして見ました。此の女の筋肉はまるで小犬の様にひきしまつてゐて、臆とその關接等は四肢にも劣らない位發達してゐました。片一方の足は直角に前へ出して、もう一方の足だけで長いこと上體を支へてゐることも出来る位頑丈

なからだなのです。根が生へたかとも思へる位なのです。木の様にですね。此の女の體格は歐洲婦人とは全然違つたものです。然もそれでゐて、異様な力の中に非常な美があるのです。』

少し間をおいてから、自分に深く親はしい考へに思ひ至りつゝ、氏は云つた。

『云は、何所にでも美はあるのです。我々の目にうつる可き女に美が欠けてゐるのではなしに、女から美を見損ふ我々の目に欠陥があるのです。美は特質であり表現である。實際人體程の特質に富んでゐるものは、他には自然の中にもありません。人體の力

と優美とからは、盡きることのない程な幾多の姿が現はれて來ます。時には花に似ることもある、屈むでゐるトルソーは草木の莖にも似てゐる。胸や頭や、つや／＼しい頭髮は花咲く花冠にもふさはしい。又ある時はしなやかな朝顔を忍ばせ、矜りに高く立つてゐる若樹を想はせもする。ユリセスがナウシカアに「あなたを見てゐると、アポロの祭壇に近いデロスにある梭欄を見てゐる様な氣がする、只一筋に大地より生へて大空に向つてゐるあの梭欄を見てゐる様な氣がする」と云つてゐます。又後ろに屈むでゐる人體を見れば噴泉を想ひ起す、エロス神が目に見えぬ矢を鹽梅したあの美しい虹とも思へる。ある時は又藝をも思ひ起させる。

私はよくモデルを後ろ向きに地面に座らせ、手足を前に投げ出させて見ました。すると、胴のところが細く臀部へ行くにつれて廣くなつてゐる脊面が、見事な線より成つてゐる藝のやうに見えて来る。

『要するに人體は心靈の鏡である、心靈から最大の美は生れて来るのです。』

* · Chair de la femme, argile idéale, o merveille,

O pénétration sublime de l'esprit

Dans le limon que l'Être ineffable petit,

Matière où l'âme brille à travers son suaire.

Boue où l'on voit les doigts du divine statuaire.

Fange anguste appelant les baisers et le coeur.

Si sainte qu'en ne sait, tant l'amour est vainqueur

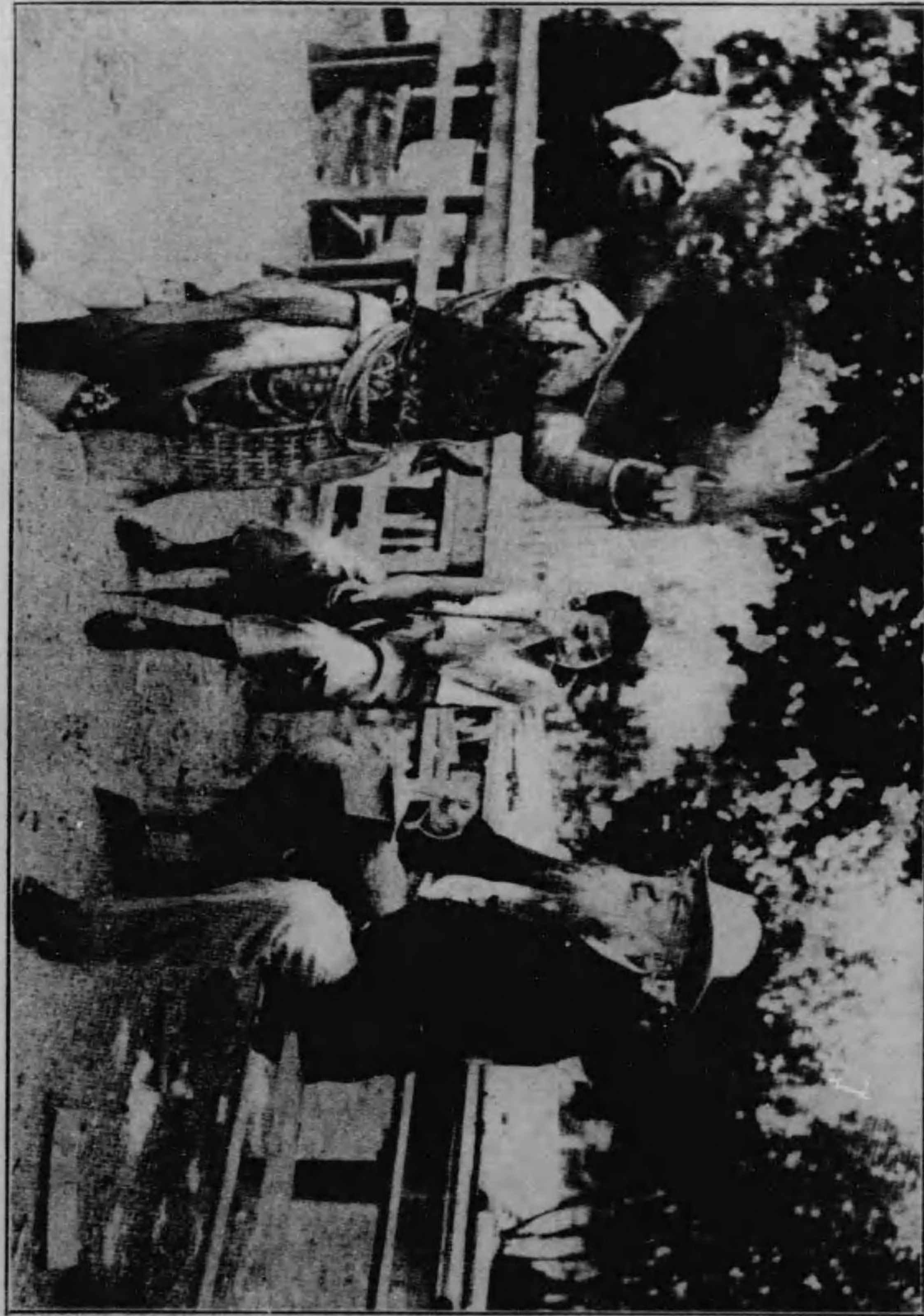
Tant l'âme est, vers ce lit mystérieux, poussée.

Si cette volupté n'est pas une pensée.

Et qu'on ne peut, à l'heure où les sens sont en feu.

Etreindre la Beauté sans croire embrasser Dieu !'

『さうです。ギクトル・ユーゴーは好く之れを了解してゐた。我々が人體を見て、あの美しい形體よりも貴むべきところは、形體の中より輝き出で、形體に光彩を添へてゐる内面の焰にあるのです。』



* 女の肉は此上もなき粘土である。その上に深くも見入る心霊の崇高さよ。衣を透して心霊の輝き出づる所に事物がある。人は土の上に聖なる彫刻家の指を認めるのだ。貴ひ土の粉末は、接吻と男心を誘ひ出す。誰しも知るここのない位い聖らかに——餘る所なしに愛は勝者の地を占め、餘す所なく心霊は誘ひ出されてゐる。——よしや此の情熱が犯し難い思ひこぼはなつてゐないまでも、官能の焼き爛れてゐる時でさへ、人が美を捕へるには神をも共に抱かざるを得ない程、之れは聖らかなのである。

第七章

昨日と今日

第七章

昨日と今日

二三日以前、予は再度ルーヴルへウッドンの胸像を見に行く途上にあるロダンに同道した。

二人がヂルテール像の前に立つや否や、先生はかッ口を切つた。『不思議な位ひではないか。之れは邪意と云ふものゝ権化です。見玉へ、彼の横目を使つてゐるのが誰か反對者を見据へてゐる様にも思へる。で狐の様に尖つた鼻を持つてゐるのが、何となくそれ

で隅々から悪口や馬鹿げた所行を覗き出してゐる様に見える。君にもその顔へてゐるのが見えるでせう。それから此の口、——盛んに勝ち誇つてゐる。之れは二筋の皺のアイロニーから成立つてゐるのです。そして諷刺の言葉を口籠つてゐる様な氣がする。

『油断も隙もない昔の饒舌家——それが此のチルテールから呼び起される印象です。元氣の好いと同時に弱々しく、そしてヒドク男らしい所のない。

——暫らく思ひに耽つてから氏は語を續けた。

『此の眼！ 私は何時も此の眼に後ろ髪を引かれてゐる。透明で、輝き返つてゐる。』

『ウードンの作つた胸像に就ては、何れと云ふ事なしにかう云ふことが言へる。此の彫刻家は、畫家やバステルを描く人の誰彼れにも秀れて、瞳孔の透明さは如何すれば表現出来るかと云ふ事を知つてゐたのです。彼は瞳孔に孔あなを穿つて、それを切り開いた。敏しく瞳孔に或る高低を作つて、それが光線を放したり捕へたりし、観る人に一種異様な感じを與へて瞳孔の生きてゐる様さまに在る閃きを模したのです。且かう云ふいろ／＼な顔面にあつて、その眼の表情の千差萬別なことは如何でせう。チルテールの奸黠な表情と云ひ、フランクリンに現はれてゐる善人と云ふ心持、ミラボーに見る權威、ワシントンの莊重さ、又ウードン夫人の笑みを含んだ

親はしさと云ひ、乃至は自分の娘や可愛らしいブロンニアルの二人の子供に見るいたすら想な目付きと云ひ。此の彫刻家にとつては、眼まなこざしが表情の大半を占めてゐるのです。眼を通して心霊を讀み取るのです。彼には少しも秘かくし立てする事が出来ない。で、彼の胸像に就てはそれの善く似てゐるか否かを問ふ必要もないのです。』

この言葉に就て予はロダンを遮つた。

『すると、貴君は似ると云ふ事を重要な點とお考へなのですか。』

『左様ですとも、無くてはならない點です。』

『けれども多くの藝術家は、善く似てゐなくつても肖像や胸像は美なり得るものだ云つてゐます。それに就て、私はヘンネーの出逢つた話を一つ記憶してゐます。或る貴婦人が、ヘンネーに描かせた肖像が自分の様に見えないと云つて不平をこぼしたのです。』

『そこでヘンネーは、アルザティアの訛りで「Hei matame, (奥様)、あなたがおかくなりになれば、後あとの方かた達はヘンネーの描いた好い肖像を持つてゐるのを幸福にお思ひの事でせう。それがあなたに似てゐるか如何か、そんな事には大たして心配なさいますまい。」とかう返事をしました。』

ロダンは答へて云つた。

『成程畫家にさうは云へます、けれども、察する所それも本當の心を云つたのではなしにふざけて云つて見たのでせう。彼は中々秀れた才能を示してゐる、その彼が藝術上にそんな誤つた考へを持つてゐやうとは信じられない。』

『兎も角差し當つて、胸像や肖像に要求される似顔と云ふ様な點をばつきりさせませう。』

『只々藝術家が寫眞のやる様に外形の容貌ばかりを現はしたり、性格の事等には少しも意を用ゐず、只管規丁面に相貌の引き寫しをしてゐたら、彼は少しも賞讃に値しはしません。彼の擱まへなければならぬ似顔と云ふのはつまり心靈のそれです。問題は只此

所にあるのです、彫刻家や畫家が顔面のマスクの下に探さなければならぬのは之れです。

『略言すれば、凡て顔面と云ふものは表現的にしなければいけない。』

——云ひ代へれば、恒心コンシエンスの默示に役立つ様にとしなければいけない

『50』

『ですが時たま顔面が心に裏切りする様な事がありはしませんか。』

『決してありません。』

『貴君はラ・フォンテーヌの箴言をお忘れではありませんか。』

fait point juger les gens sur l'apparence (見かけで人を判断してはいけない)』

『その箴言は只上面うへだけを見る人達に就て云はれた事なのです。そ

れも表面の様子と云ふものは、輕卒な判断をさせるからです。ラ・フォンテーヌは、小さな廿日鼠が猫をあらゆる生き物の中で一番親切なものと間違へたことを書いてゐる。で廿日鼠のことで——と云ふのは、批評をする才能のない輕卒漢の事にもなる。——猫の顔付は温和し想に見えても、注意深く見ればその眠つた様な姿の下に殘酷な性質が匿れてゐる、と云つてゐます。觀相學者には、容易く言を左右に托してゐる者と全くの親切者との區別が付く。例へば虚偽の中からも眞理を見現はす藝術の役目は、歸する所それと同じなのです。

『實際の所、胸像又は肖像畫程多分に洞察力を要する藝術作品は他

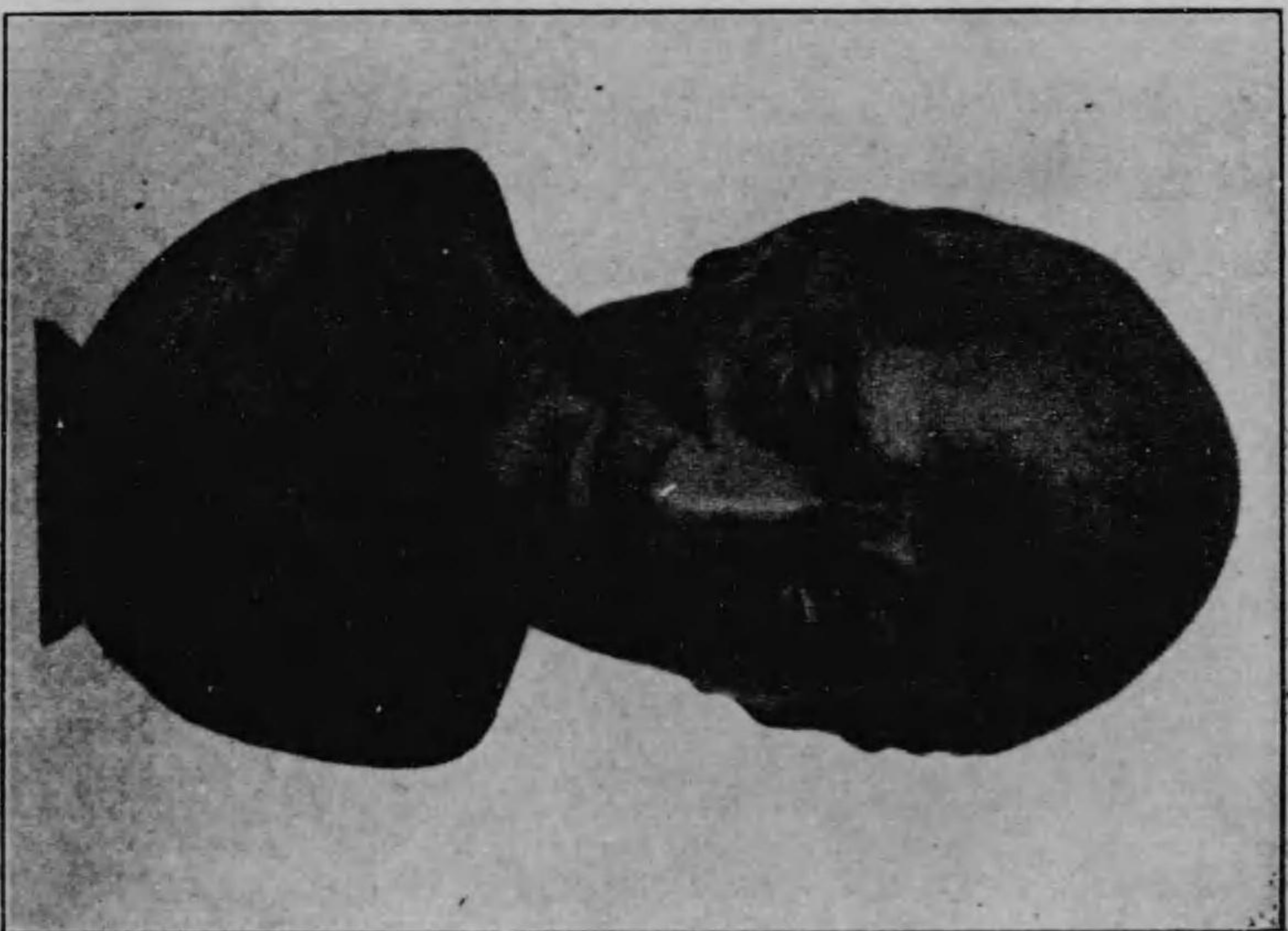
にありません。藝術家の仕事には、知解よりも以上に手工が必要であるとはよく云はれる事です。君は只單に此の誤りを正す爲めにのみ、秀れた作品の研究をしてゐたのです。かう云つた作品は詳しい評傳にも値してゐます。例へばウードンの胸像は、筆に上つた回想録にも等しい。時代、人種、職業、個人的人格、——かう云ふ凡てがそこに明示されてゐるのです。

『バルテールと相對して此所にルソーがある。その眼ざしにある非當な鋭さ。之れは十八世紀のあらゆる人物に共通の點です。彼等は批評家である、そして前化には質問もされずに取つておかれ

たあらゆる要所々々を問ひ正してゐる。彼等には探求する眼があるのです。

『所で彼の人柄に就いて見ると、彼はスホスの平民です。チルテールが貴族的で何所となく垢脱けがしてゐるのに、ルーソーは武骨で如何にも平民々々してゐる。分けても突き出てゐる頬骨、小鼻、角ばつた脣——かう云ふ所に人は昔の地付きで時計製造をしてゐた人の子を見るのです。』

『で職業を見れば、彼は哲學者です。なだらかに思慮深さうな額、往古のタイプはその頭に巻いてゐる古曲的な紐に依つて調子付けられてゐる。顔付きはことさら粗大に、髪の毛は伸びたまんまに



されてゐて、何所かディオゲネスやメニバスに似通つてゐる。之れが自然に返れと説き原始の生活に着けと説く人なのです。

『個人としての性格に就て云へば、一般につまつてゐる顔からして、之れは厭^{ミゼンソロフ}人です。眼^{まなこ}ぢりは引きつまり、額は苦勞のあるらしい線に引かれてゐる。之れが、時にはその理由もあつて、迫害を嘆^{なげ}いてゐた人の顔です。

『之れは彼の「懺悔録」よりも秀れた彼その人に就ての註解ではありませんか、如何です。

『次にミラボーを見れば、先づその属した時代が現はれてゐる。戦を挑む様な様子、手入もしない假髮^{カツ}、不用意に着た着物。革命

的な暴風の氣息が、此の一聲高くそれに答へやうとしてゐる荒々しい野武士の身邊に立ち迷つてゐる。

『人柄は、美しく切れの入つた眼ぶたや、傲慢な額の勢好い様子に現はれてゐる。之れは前代の貴族です。然し痘痕のある頬の民主的な重々しさや、肩の間に沈んでゐる首筋は、クーン・ドリケティからティエールの一派を忍ばせてゐる。その解釋者に彼はなつて來たのです。』

192

『その職とした所は、護民官トリビュンです。口は恰かも傳話筒が聲を向ふへ傳へやうとしてゐる様に突出してゐる。で、彼も亦多くの演説家とする様に頭を擧げてゐる。それは自分の脊が低い爲めです。此の

タイプの人、胸や胴が飽くまで發達してゐる。眼は誰れにも止まつてゐずに、人々の大集團の上に流れてゐる。之れと云つて特に見つめる所のない宏大な一瞥なのです。ねえ君。此の一つの頭部の中にあらゆる群衆、——のみならず國を擧げて耳をすましてゐる幾萬と云ふ公衆を呼び起すのは、驚異に値する仕事ではありませんか。

193

『最後はその個人としての性格に就てです。鋭感な唇、二重になつてゐる唇、それと震へてゐる鼻孔とを觀察すれば、君は或る欠陥——放蕩と享樂に忙しい心——を認めるでせう。實際さうなのです。』
『あらゆるウードンの胸像から、同じくかうして性格を示す線條を

見取るのはわけもない事です。

『此所には又フランクリンがある。重々しい氣分、ごつしり落ち込んだ頬、と、之れは以前の工匠です。使徒の丈長い頭髮、親はし氣な仁慈の氣持。之等が公衆を徳に導く、善い性質のリチャードです。

『頑丈に高い額は前の方へ傾き加減になつてゐる。それは一徹の性情を示してゐるのだが、依つてフランクリンが高遠の教育を體得し、次第に登つて行つて素晴らしい篤學者となり、遂に自分の國をも意の下に動かした事の證とするに足るものです。が、その眼と口元とにある五分も抜け目のない様子。ウードンは總體としての重々しさに迷はされて了ひはしなかつた。彼は財産をこしらへ上げ

た打算家の厚顔な物質主義と、英國政略の機密をたぐり出した外交家の隅へはおけない所とを見抜いたので。此所に、近代アメリカの一祖宗が生き返つてゐる。

『如何です。之等の優秀な胸像の中に、半世紀間の部分的な年代記が見出せるではありませんか。そして、筆に上された美事な物語の場合同様、之等のテラ・コタ(粘土と砂とで、煉瓦を作る様に焼き堅めた像)や大理石やブロンズの記憶にあつて最も我々を喜ばせるものも、そのスタイルの秀でた立派さ、之れを作つた人の手の冴へ、それと、之れを造り出した人の生一本に佛蘭西氣質かたぎな、人を魅する人格に附隨する裕達なところにあるのです。ウードンは、貴族的な先入主を取り除

いたサン・シモンです。頼才の利く所等はサン・シモンです。だがもつと腹の大きい所がある。何と云ふ圖抜けた藝術家なんでせう。』

そこで予は、目の前にある胸像に就て氏の云つた所を確めながら口にした。

『他人の心持コンシャスネスちをさう迄立ち入つて洞察するのは、随分難かしいことに相違ないでせう。』

196

『さうですとも、』それから少し反語の調子で續けた。

『けれ共胸像を刻んだり肖像を描いたりする藝術家にとつて此の上

もなく難かしい事と云ふのは、自分の作る可き作品から出て来るのではなく、その人の爲めに自分の制作をする依頼者から出て来るのです。奇體キタイな如何ドウも出来ないしきたりで、自分の似顔を云ひ付ける人と云ふのは何時イツも決まつて自分の選んだ藝術家の才能を向ふ見ずに掻き亂す人なのです。人が自分自身をありのまゝに見ると云ふことは殆んど無いと云つて好い。で、例へば自分自身を承知であるにもせよ、ありのまゝに自分を現はせとは藝術家に望まない。或ひは官職にある様にとか、又は俗世間の操り人形の様にと自分を現はすことを望んでゐるのです。その人の營んでゐる職務や、社會に保つてゐる地位やを取り入れて、彼の中にある人

197

間と云ふ所をすつかり除いた物が氣に入るので。長官は禮服を持ち出し、將官は金ピカの服装をと所望する。人が自分達の性格を見取るか如何か、そんな事にはまるで頓着しないのです。

『之れは、依頼者に金の縁取りだの官職にある様子だのと云ふ非人格的な肖像畫を平氣で渡してゐる多くの平凡畫家乃至彫刻家の、成功する所以を云ひ現はしてゐる。かう云つた藝術家が一般に素晴らしく人氣のある藝術家です。それと云ふのも、自分のモデルとする者に富や高位の假面を借し與へてゐるからです。肖像が誇大になつたり、不自然な磨きを掛けた人形に似て來れば來る程、頼んだ人は満足の意を表するのです。』

『勿論常にかうと限つたわけではない。』

『一例を挙げれば、十五世紀の或る君主達は、自分達の肖像をピサネロ作のメダルに鬚狗ハイエナや兀鷹ツアルテニアの様に描かせて喜んでゐた様に思へる。きつと彼等は自分獨特の所を矜りとしてゐたのです。でなければ、さう云ふよりも以上に藝術を愛し尊んでゐたのです。で、それが心靈を統治する者の見せしめとして行つた物である迄も、藝術家の隠し立てない赤裸な心を受け入れてゐたのです。』

『ティシアンは、法王ポール三世に貂てんの様な鼻を憶する所なく與へ、躊躇せずおぼろにチャールス五世の大風な無慈悲な様子をも強めて描き、フランシス一世の好色な様をも描いた、けれどもそれで少しも面

目を失ふ様なことにはならなかつた。エラスケスも、フィリップ王五世の肖像を美男ではあるが能無しの有様に描き、伴らずにその開けつばなしの口を示したが、寵愛を損ふことはなかつた。そしてスペインの君主は、その子孫の代になつてから天才の擁護者であつたと云ふ強い榮譽を得るに至つたのです。

『然し今日の人達は、本當の事を恐れて嘘を愛する様にと出来上つてゐる。彼等にはありのままの自分達が胸像に現はれると面白くない様に見える。誰も彼も美顔術が必要欠く可からざるものになつてゐる。』

『それが非常な美人になつてさへも、云つて見ればその顔の線なり

が極めて好い様子を持つてゐる者でさへも、才能ある彫刻家がそれを解き出す段になると、自分の美しさに對してビクビクしてゐる。で、彼等は一文にもならない人形の様な相貌を與へて、自分達の容貌を醜くいものにして下さいと藝術家に頼むのである。

『ですから、胸像を造り上げるのは長い戦闘を行ふことになるのです。その際貴む可き一事は、自分自身を弱くせず、飽くまでも自分の信條を立て通す様にとすることです。若しその作品が拒絶されるとなる、それは好くない。けれども度々ある様に、拒絶されると云ふ事が作品の秀れてゐる事を裏書きするのなら、恐らくそれにも増して好いことはない。』

『又成功した作品を受取る依頼者の方の場合になつて見れば、當人は不満にもせよその氣持の悪さはほんの少しの間なのです。何故と云つて、直きに鑒識家は彼に胸像の挨拶をしに来て、終ひにそれを賞讃することになる。すると極めて自然に、彼は何時もそれを好んでゐると自分から云ひ出す様になる。』

『又、自分の友達や親類の者を無報酬で造つた胸像が一番善いと云ふことにも氣の付く筈です。それは、何時も見てゐたり愛してゐたりするので、藝術家がよくそのモデルを知つてゐるからと云ふばかりではなく、その作品が無報酬であると云ふ上から、自分の思ふ存分に制作する自由が利く爲めです。』



『所が優秀な胸像も、夫を進物として送つた場合にさへよく受納されないことがあります。傑作と雖も、送つた人達に對して故意にしたもの、禮を失した物と思ひ做されるのです。彫刻家は自分の道を突き進んで、自分のベストを盡す所からその快樂や報償を見出さなければなりません。』

予は氏の語つてゐる公衆の心理に頗る興味を覺えてゐた。がロダンの反語には、カナリの苦味にがみが加味されてゐると云はなければならぬ。予は云つた。

『先生、貴君のなさる仕事に就ての試みこころの中、一つ貴君が省はぶいてお

ゐでの様な所があります。つまり少しも表情のない顔付きをした者や、明らかに痴愚の様を現はしてゐる者の胸像をこしらへ上げる事ですが。』

ロダンは笑みを含んで、

『それを試みの中に數へられはしない。』
で返事をした。

『私の大好きな「自然は常に美である。」と云ふ金言を君も忘れてはいけない。我々に必要な所は只モデルが何を示すかと云ふ、それを理解するにある。君の云つてゐるのは只表情のない顔のことはかりに過ぎない。藝術家にとつてはそんな顔は有りません。ごん

な首でも藝術家にとつては興味があるのです。彫刻家をして無趣味な顔付きの注意をさせ、世間並みのおしやれに心を奪はれてゐる馬鹿者を我々に示させれば、立ち所に美しい胸像が出来上つてゐるのです。

『それと、淺薄だと云はれてゐる物も、よく單に教化の少ない爲め發展をしなかつた自覺の事である場合があります。さう云ふ場合顔には、ゾールに圍まれてゐる様な知解の神秘的な人を引き付ける面影が現はれてゐる。』

『要するに、——何と云つたら好いか、——最も價値の少ない首も生命の住家にはなつてゐるのです。素晴らしい程な力の住家にも

なつてゐるのです。そして、量り知れぬ位ひ傑作に資す可き素材を提供してゐるのです。

* * *

それから餘程日を経て後、予はムードンにあるロダンの工房で澤山に氏の美しい胸像の模型を見た、で、それ等の呼び起す記憶を話す様にと氏に頼む機會を得た。

ギクトル・ユーゴの像も其所にあつた。默想に耽つてゐて、前額には妙な溝がついてゐる。火山の様な亂れた頭髮は、とんとその頭蓋から白炎を噴き出してゐる様である。深遠に動亂せる近代抒情詩

の人格化そのものであつた。

ロダンは云つた。

『自分をギクトル・ユーゴに紹介したのは友達のバヂールでした。バヂールはラ・マルセイユ新聞、後にはラントゥランシジャン新聞の書記をしてゐたのです。で、ギクトル・ユーゴを崇拜してゐた。此の偉人の第八十回誕生紀念に公けの祝ひをしやうと先づ口火を切つたのも此の人でした。』

『祝賀會は、君も知つての通り壯大な意味深いものでした。詩人は露臺に出て、自家の前へ喝采しに来てゐた數知れない群集に向つて挨拶をした。彼は自分の家族を祝福してゐる家長と云つた様に

見えた。それも彼が祝賀會をこ幹旋した人達に、その日一日柔和な態度で接してゐたからです。で、バヂールが何の面倒もなく私を彼に直ぐ引き合せられたのでした。

「不幸にも、丁度ギクトル・ユーゴーはギエーンと云ふ俗彫刻家に惱まされてゐた。ギエーンは下らない胸像を作るので無理やりに三十八度もユーゴーを前に座らせたのです。それで私がおづく
「コンナムプレーション黙」の作家の肖像を刻みたいと思つてゐる旨を告げると、彼はそのオリムピア式の眉に八の字を寄せた。

「彼はかう云つた。君の制作をさまた防げる氣はないけれど、前以て云つておくが自分は姿勢も執りません。君の好い様に自分のしきたり

を變更することもしません。で、君の好きな様に如何なりともおしなさい。」

「そこで私は歸つて来て、晩くまで肉付けの仕事をし易くする用意にと先きの尖つた鉛筆を澤山こしらへた。それから臺と粘土を少し持つて行つた。が當然之等のだらしない諸道具は露臺にだけしか据へ付けられなかつた。それに大抵ギクトル・ユーゴーは友達と應接室にゐたので、私の仕事のやり悪にくさ加減と云つたら君にも察しが付くでせう。私はいつも注意深く此の大詩人を研究してゐた、で彼の面影を記憶に焼き付かせる様に、焼き付かせる様にと努めてゐた。丁度今見たばかりの記憶を粘土に刻み付ける爲め、



急に駆け出して露臺へよく行き行きした。それも度々、途中で印象の影がボンヤリして了ふ、で臺の所迄行きはしても、粘土に手を着けると云ふ事が一寸出来ないので。私は心を決めてもう一度モデルの方へと引返さなければならなかつた。

『殆んど此の制作も終りになつた時分、ダルーがギクトル・ユーゴーに紹介して呉れと自分に頼んだ、で氣嫌よくその役を引き受けたが、偉大なる老人はその少し経つと死んで了つた。で、ダローには只氏の死後に取つた模型に全力が盡せばかりでした。』

かう話しながら、氏は予を不思議な石塊の入れてある硝子箱の所

へ導いて行つた。それはアーチに使ふ要石かなめいしであつた、カーヴを支へる爲めに建築家がアーチの中央に入れる石であつた。その石の面上には、石塊の形に従つて頬と顚顚こゝかみとに當てはめてある面かみが刻み付けてあつた。予は其所にピクトル・ユーゴの顔を認識した。

『建物の入口にある要石が詩歌に捧げてある、とかう私はいつも想像してゐるのです。』

大彫刻家はかう云つた。

予にも容易くそれを心に描くことが出来た。此の要石の様に紀念像のアーチを支へてゐるピクトル・ユーゴの容貌は、あらゆる思潮とあらゆる一時代の活動力とが上に集まり載つてゐる天才の象徴と

なつてゐるのだ。

『私は此の考へを、それを實行し想な建築家に與へてやります。』ロダンは付け加へて云つた。

直ぐそばにアンリ・ロッシュフォールの胸像原型が立つてゐた。之れは好く知られてゐる像である。頭は暴徒のそのの様に、前額はいつも朋輩といがみ合ひをしてゐる喧嘩早い子供の額にも似て瘤だらけになつてゐる。その大掴みな頭髪の房は、暴動を知らせるシグナルの様に波打つてゐる様にも思へる、口は反語に扭ぢけてゐ、狂氣染みた口鬚が生へてゐる。不斷の反抗である。批評と格闘との

精神そのものである。賞讃に値ひする作品である、人は此の中に、我々當代の心に投じた反映の一面を見るのだ。

ロダンは云つた。

『アンリ・ロッシュフォールと知り合ひになつたのも、同じくバヂールを通じてゐる。ロッシュフォールは彼の新聞に主筆をしてゐたので、秀れた論戦家は快よく姿勢を執つてくれた。彼は非常に氣持の好い心の人で、彼の云ふ所に耳を傾けてゐるとそれに魅せられて了ふ、で、一瞬時も黙つてはゐられない人だつた。彼は、私が餘り商賣人根性を持つてゐると云つて氣持好く叱り等した。又笑ひながら、一度モデルに座ると一塊粘土を加へ、次ぎの時にはそ

れを私が取り取りしてゐると云つてゐた。

『それから何日か経つて、彼を刻んだ胸像が趣味の人達から賞讃された時には、彼も腹藏なくそれに聲を合せてゐた。けれ共私の作品が、私が彼の家から持つて來た當時そのまゝにしてあつたとは如何しても信用しなかつた。で再三再四「君は大分あれをいちり直した。」と云つてゐたが、全く、私は以來爪一つもそれに觸りはしなかつたのです。』

ロダン是一方の手を房々とした毛の上に、他方を口鬚の所に置きながら、予に尋ねて云つた。

『今はどんな印象を興へま？』

『ローマの皇帝だとも云ひたい氣がするでせう。』

『君に云はせたいのもつまりはそれなんです、私がロッシュフォールに見出した位ひ純にラテンの古典的タイプを見出した事は、未だ曾てありません。』

若し此の帝國の昔し仇敵が、自分の顔形ちのケーザルのそれに似通つてゐると云ふ奇論めいた事實を未だ知らないとすれば、予は賭けをしても好い、之れは彼を微笑ませる事だらう。

少し前にロダンがダルーの事を口にした時、予は氏に依つて刻まれたリヌクサンブルにあるダルーの胸像を、心に想ひ浮べてゐた。

矜りを帯びた、戦を挑むと云つた風の頭像である。瘦せた、町外れの子供に見る様な筋張つた首を持つてゐる。刺毛のある工匠の様な鬚、狭い額、昔の共産主義者によく見る荒つばい眉毛、度し難い民政論者の熱氣なつげを持つた横柄な気分。それと、大きな切れの好い眼とデリケートな顛顚の彎曲とは、熱心な美の愛人を現はしてゐる。

質問に答へて、ロダンは此の胸像を、ダルーが大赦の恩典に浴して英國から歸つて來たその時に作つたのだと云つた。

尙氏は云つた。

「私が彼をギクトル・ユーゴーに紹介してから直きに、二人の関係も絶へて了つたので、遂に之れを彼は持つて行かなかつた。

「ダルーも大藝術家でした。彼の澤山な作品には秀で、裝飾的な價値があつた。十七世紀の最も美しいもの、仲間に加はる可きものです。

「若し彼に官職を欲する弱さがなかつたらば、傑作を残す他に何も作りはしなかつたのでせうが、彼は我々共和政體の椅子チェアに倚らうとし、あらゆる同時代藝術家の頭目にならうと企てたのです。その野心を充たすに先立つて死んで了つた。

「一時いちじに二つの仕事を行らうとすることは出来ません。役に立つ手蔓を得たり役割りを演じたりするのに費される活動力は、凡て藝術に無感覺なものです。陰謀をたくらむと云つた質たちの人は馬鹿で

はない、で、藝術家がさう云ふ連中と競走することになると、矢張り彼等同様するだけの努力はしなければならない、それで制作に残す時間が覺付かなくなつて了ふのです。

『誰が知つた事でせう。若しもダルーがいつも工房にゐて自分の可き所の追求をしてゐたら、疑ひもなく段々前方へと奇蹟を持ち運んで、その美にあらゆる人々の眼を見張らせる事も出来たのです。一般の承認は、云ふまでもなく彼が得やうと云ふので百方手段を盡してゐた藝術的君主權を、彼に報ひもしたのです。』

『さうは云ふもの、彼の野心も全く水泡に歸したと云ふわけではない。市廳オッタル・ラウニに振つた彼の勢力は、我々に我々の時代の一大傑作を

與へてゐる。行政委員達の明らかに持つてゐた反對にも係らず、市廳の階廊裝飾をピュギス・ド・シャヴンヌに命じたのは彼でした。で此の大畫家が市建築物の壁を天來の詩歌を以て如何に美しく輝かしたか、それは君も知つてゐるでせう。』

此の數語は、ピュギス・ド・シャヴンヌの胸像に注意を向けて行つた。氏は云つた。

『彼は頭を高くもたげ、堅く圓まい頭蓋はヘルメットを被つてゐる様に見えた。その展ひらいた胸は、いつも胸當てを着け馴れてゐる様にも見えた。彼に就て、その名譽の爲めフランシヌ一世の傍らに闘



つてゐるバギアを想像するのは、わけも無い事でした。』

その胸像に、人は往古貴族の面影を認めるのだ。高い額と眉毛とは哲學者を現はしてゐ、廣大に物を注視してゐる穩かな眼の光は、大裝飾家、崇高なる風景畫家、それを表示してゐる。此のサン・ヂュヌ并エーヴの作家をあらゆる近代畫家の中でロダンは最も強く讚嘆し最も深く尊敬してゐるのだ。

氏は聲を強めて云つた。

『シャヴヌが我々の間に生きてゐた事を考へたり、最も光彩ある藝術の一時期にも値する此の天才の事を考へると！ 自分は彼を見た、彼の手も握つた事がある！ 何だか自分がニコラス・ブーサン

の手握つた様な氣がする。』

快よい言葉ではないか。最も光り輝いてゐる者と席を同じふさせる爲めに、自分と同時代者のある者を過去に送り入れ、そして此の半神デミゴッドとも云ふ可き人と肉體的に觸れ合つた、その生々なましい思ひに心を動かす、——如何な嘆美の辭を呈しても之れ程差し迫る事は出来ない。

ロダンは續けて云ふ。

『ピュギス・ド・シャヴヌは私の造つた自分の胸像を好すかなかつた。之れは自分の今までの経歴の中でも苦しい事でした。彼は私が彼のカリカチュアを作つてゐると思つてゐたのです。けれどもその彫像

に、自分が彼に對して感じてゐたあらゆる感激と崇拜とを私の表
現し得た事は信じて疑はない。』

ビュギスの胸像は、引いて予に之れもリュクサンブールにあるジャン・
ポール・ローランの胸像を思ひ出させた。

圓形の頭部、可動性の物に熱中して殆んど息も絶へ想な顔、——
之れが南國人である。——或點古風で粗大な表現をされてゐる。——
眼は何か遠い國の幻想にかられてゐる様である。——人々が無作法
な烈しい性情を持つてゐて、未だ蠻風の半ば残つてゐる時代に屬し
た畫家が之れである。

ロダンは云つた。

『ローランは私の古い時分から識り合つてゐた友達です。バンテノ
ンの裝飾畫の、サン・デュヌギエーヴの死に描き込まれてゐるメロ
ギンチアの一戰士に、私が姿勢を執つた事もある。彼とは常に隠
し立てなく親しくしてゐた。「カレーの市民」の仕事を斡旋したの
も彼でした。尤も一個の分しか自分に出さない價格でブロンズの
像を六個渡したのだから好い仕事ではなかつたが、自分の最も自
信のある作品を作る上に刺戟をしてくれた點で、深い感謝は彼に
してゐるのです。』

『彼の胸像を作るのはカナリな楽しみでした。その口を開けた儘に

作つたと云ふので、彼は友達らしい調子で自分に小言を云つた。自分はそれに答へて、君の頭蓋を先づ下圖にとつて見る所、如何も君は昔スペインにゐた西ゴート族の子孫らしい、で、このタイプは下顎が特徴になつてゐると云つたが、彼が此の人種學的な觀察に賛同してそれを是認したか如何だかそれは知らない。』

此の時、予はファルギエールの胸像に目を付けた。短氣な、爆發もし想な性格の人、彼の顔は暴風に荒された土地の様に、瘤や皺に蒔き散らされてゐて、不平家らしい口鬚があり、厚く短かい頭髮が生へてゐる。

『彼は小さい牛の様な男でした。』
とロダンは口にした。

予はその首の太さに注意したが、そこにある皮膚の摺ひだは殆んど牛の喉に見る垂肉たれにくの觀をなしてゐた。頭は前に傾いて頑丈に、今にも前方へ突き出す支度をしてゐる。小さな牛！ロダンはよく動物の例へを引いて来る。長い首で、機械的な身振りをすると云つた者は、右方左方に小盗みをする小鳥である。又少し過ぎもする程可愛らしく女々しい者は、チャーレス王の犬だ、と凡てかう云ふ風に。之等の比較は、あらゆる相貌を一般的分類の中に入れやうとする心の仕事を明らかに、容易たやすくするのである。

ロダンは如何云ふ事情でファルギエールを識つたかと云ふ、それを予に語つた。氏は云ふ。

『文士協會が私のバルザックを拒絶して時でした。私に次いで命令の下つたファルギエールは、彼の友誼と云ふ點から全然私の誹謗者達には同意しないと云ふ態度を自分に示した。同情の心に動かされて、私は彼の胸像を作らうと云ひ出した。それが完成された時、『彼は大成功の物と考へたのです。——私は知つてゐるが、彼の目の前でその批評をした者に對して、彼は辯護までしてゐた。で、自分の番になつて、彼が私の胸像をやつた、それは大變美事なものなのです。』』

足を歸さうとした時、予はベルテロの胸像をブロンズに模した物のあるのに目を引かれた。大化學者の死に先立つ僅か一年の時、ロダンはそれを作つたのだ。大學者は、その仕遂げた著作の知識の上に休んでゐる。彼は深く考へてゐる。彼は孤獨で、自分自身に面と面とを合せてゐる。全く孤獨で、昔の眞理の崩壊して行く有様に面と面を合せてゐる。自然の前にあつて孤獨である。或る者達の秘密は彼も洞察したが、それも非常に底深い神秘として残つてゐる。空の無限の深淵の一端に孤獨であつて、その惱んでゐる眉、その下がつた眼は憂鬱の氣合ひに充ち々々てゐる。之の美はしい頭像は、近代的

知解の寓意の様である。知識に飽き足らず思想に勞れ果て、『何の役に立つのだらう。』と尋ねる所に終つてゐるのだ。

予の讚嘆したもの、主人のそれに就て語つたもの、——あらゆる胸像が今は予の心の中に群がり寄つた、でそれ等が予には我々の時代の上にある證卷の豊富な寶の様に見えて來た。予は云つた。

『ウードンが十八世紀の記憶を書いたとすれば、貴君は十九世紀末のそれを書いたのです。貴君のスタイルは貴君の先輩のよりも一層烈しく、一層強大です。貴君の表現は多少秀美には欠けてゐても、私に云はせれば以上に自然で以上に劇的になつております。』

『十八世紀にあつては著しく目に着いて笑談じやうたんの氣分にも充ちてゐた懷疑的な所も、貴君に至つては力強く鋭くなつて來ました。ウードンドンの作つた人物はずつと人附きの好い人達ですが、貴君のはずつと自我を中心にしてゐる人達です。ウーレヂムドンののは制度の亂用を批判してゐるのですが、貴君のになると人間の生活そのものに疑問の歩を入れ、實現されない慾望の惱みをも感じてゐる様に思はれます。』

ロダンはそれに答へた。

『自分は自分の最善を盡した。自分は嘘を吐かなかつた。一度も自分は同時代者に諂らつた事がない。で私の胸像は度々面白くなく



思はれた、それも常に非常に眞面目であつた上からです。自分の
作つた胸像には確かに一つの効績がある。——眞實と云ふことで
す。美の前にはそれ等を召し使ひの様にしておきませう！

第八章

藝術上の思想

第八章

藝術上の思想

ある朝、予はロマン氏と共にその工房にゐたが、極めて印象深い氏の一作品の前に歩を止めた。

それは若い女の像であるが、苦悶の様さまにか扭ひぢつた體軀は、何か神秘の苦惱に對して祈りをしてゐる様に見える。頭は氣力も無く垂れ、唇も眼も閉ぢられてゐる。その顔に見る苦悶の有様がこの女の心の争ひを現はしてゐないとするれば、見る人は眠りに落ちてゐるのかと

も思ふ。此の像を見て一番意外に思ふ所は、手も足も着いてゐないことである。作家が何か自分に不愉快を感じた時、それ等を壊して了つた様に思へる。誰しも像の不完全を惜まないわけには行かない。予も主人にこの氣持を話さないではゐられなかつた。

『何ですつて？』

——氏も亦意外の面持で聲を立てた。

『私のわざとあゝ云ふ風にしてゐるのが君には解りませんか。之れは「默想」を現はしてゐるのです。動く可き手もなく、歩く可き足もないのは、それだからです。映像がちやんとしてゐて、導く可き歸決點に對して多くの手助けともなるものを暗示したら、その

結果が情性になつて了ふのに氣付きませんか。』

之の言葉を聞くと予の第一印象は撤回されて了つた。で、腹藏なく彫像の美しい象徴を讚美する事が出来た。次いで、この女が、實現する事の出来ない理想にかられ、悩まへる事の出来ない無限に取り圍まれて、何れとも決斷出来ない問題に襲はれてゐる人間の知解の寓意である、と云ふことが解つた。此の體軀の扭ぢれてゐるのは、思想の苦悶とその榮光、及び答へを得る事の出来ない疑問に洞察し入らうとして無益にもする決心、を現はしてゐるのだ。尙その四肢を取り除いたのは、考察深い人々が動的生活に對して感ずる超越し難い嫌惡の情を示してゐるのだ。

のみならず、此の像は度々ロダンの作品に就て口にされる批評を思ひ起させた。で、それに同意はしてゐないけれども、氏が何と答へるかそれを知る爲め、予は氏にその旨を告げた。予は云ふ。

『文學者達は常に貴君の作品に表現されてゐる要素的な眞理を賞讃してゐますが、決まつてその批評家達は固苦しく、塑造的とよりも寧ろ文學的な靈感があると云ふ點で、貴君を批難してゐます。それで、貴君が文士達のあらゆる修辭辨飾に入口を提供する主題を用意してゐて、容易く作家を納得させる等と云ひ、藝術はそんなに哲學的な野心を容れる境地ではないと聲を強めてゐます。』

ロダンはそれに鋭く答へをした。

『私のやる肉づけが善くないとか、解剖に誤りがあるとか、動きを表現し損なつたとか、或ひは自分が大理石を仕生かす手法に無智だとか云ふのならば、批評家の云ふ所は萬々正しい。けれども自分の彫像が正確であつて生命に充ちてゐる場合、如何云ふ點から彼等に自分の批難が出来やう。彼等が自分をして形體に意味を入れさせないと云ふ權利を持つてゐるか如何か。私がある觀念を示したからと云つて、乃至は、元來一定の價值を持つてゐて眼を楽しませる或る形體を一層豊富にしたからと云つて、技術を外所にした上で彼等にその文句が云へるか如何か。本當の藝術家と

云ふものは、常住巧みな職人として仕事をして行くのに満足の出来る者だ、又は、知解力の必要を感じない者だと想像して見る。之れは、可笑な誤解です。それ所ではなく知解力と云ふものは、最も心霊的抱負に缺けてゐるらしく思へ、只單に眼を喜ばせるものらしく思へる形なり像なりを描いたり刻むたりする場合、眞義の藝術家にとつては缺く可からざるものなのです。善き彫刻家が立像を造らうとするに際しては、その物の如何を問はず、先づ最初明確に總體としての觀念を掴まへなければいけない。それから、自分の制作が終りになるまで此の全體としての觀念を心に持續してゐて、作品にある各最小部分をもそれに従はせ適合させる様に

としなければいけない。これも、烈しい心の努力と思想の集中とがなければ、出來上るわけの物ではない。

『藝術家には知解力がないと一般に考へさせる様にしたのは、疑ひもなくその私人的生活に多くそれが缺けてゐるらしく見えるからです。畫家や彫刻家の傳記には、或る大家達に見る様な率直質朴の逸事奇聞が大部分を占めてゐる。成程休む間もなく自分の仕事に就て考察を廻らしてゐる偉人になれば、時々日常の生活に心が上の空になる事もあるに相違ない。歸する所、多くの非常に知解力に富んだ藝術家達には、大ざつばな觀察をする人から見れば、ばかりが聰明の印となつてゐる、物を手輕に云ふことや當意即妙

の返事をする事が缺けてゐるので、偏狭らしくも見える様になるのです。』

予は云つた。

『實際、誰にしろ大畫家や大彫刻家の心靈的な氣力と競走する事は出来ませんから。ですが今の質問に返つて、——藝術と文學との間にこの二つを區分する鋭い線はないものでせうか。藝術家の横切つてはいけない鋭い線がありはしないでせうか。』

ロダンはそれに答へた。

『私はハッキリかう云ふけれども、自分の關してゐる所にはさう云つた限界を立てる事は出来ない。』

『自分の意見に従へば、彫刻家が美しい作品を造り出すことの邪魔になる様な、そんな規則は一つもありません。』

『之れは彫刻である又は文學であると云ふのが、どんな相違になるのです。區別したと云ふので、人達が利益を得るのですか又はそれが面白いのですか。繪畫・彫刻・文學・音樂は一般に信じられてゐるよりも以上に關連し合つてゐます。それ等は自然の光にある人間の心のあらゆる情緒を表現してゐる。別々にわかれてゐると云ふのは只に表現の手段ばかりなのです。』

『然も彫刻家が、自分の藝術の手段に依つて通例には只文學乃至音樂に依つてのみ現はされてゐる印象を暗示する事に効を納めた場合、何故世人はその咎め立てをするのだらう。最近人々は、パレー・ロイヤルにある私の非クトル・ユーゴーを評してあれは彫刻ではない、音樂であると云つた。そして罪もなく付け加へをして、此の作品が彼にはベートフェンの諧調を思ひ起させたと云つてゐたが、そんな筈があり得やうか！』

『尙自分は、文學を藝術的手法から引き離すその相違點に氣を付けて見る必要があると云ふのには異議を立てない。何よりも先きに、文學は作像することの力を借りずに觀念の表現が出来る



と云ふ、特質を現はしてゐます。例へば、かうも云ふ事が出来る。

石の塊りに考へ深い女を作像する必要もなく、「或る深奥な反映も
屢々不動作の中に終りを告げてゐる」場合がある。

『で、言葉に依つて抽象を弄ぶと云ふ此の能力は、云ふ迄もなく思想の領域にあつては他の藝術にも増る利益を文學に與へてゐるのです。』

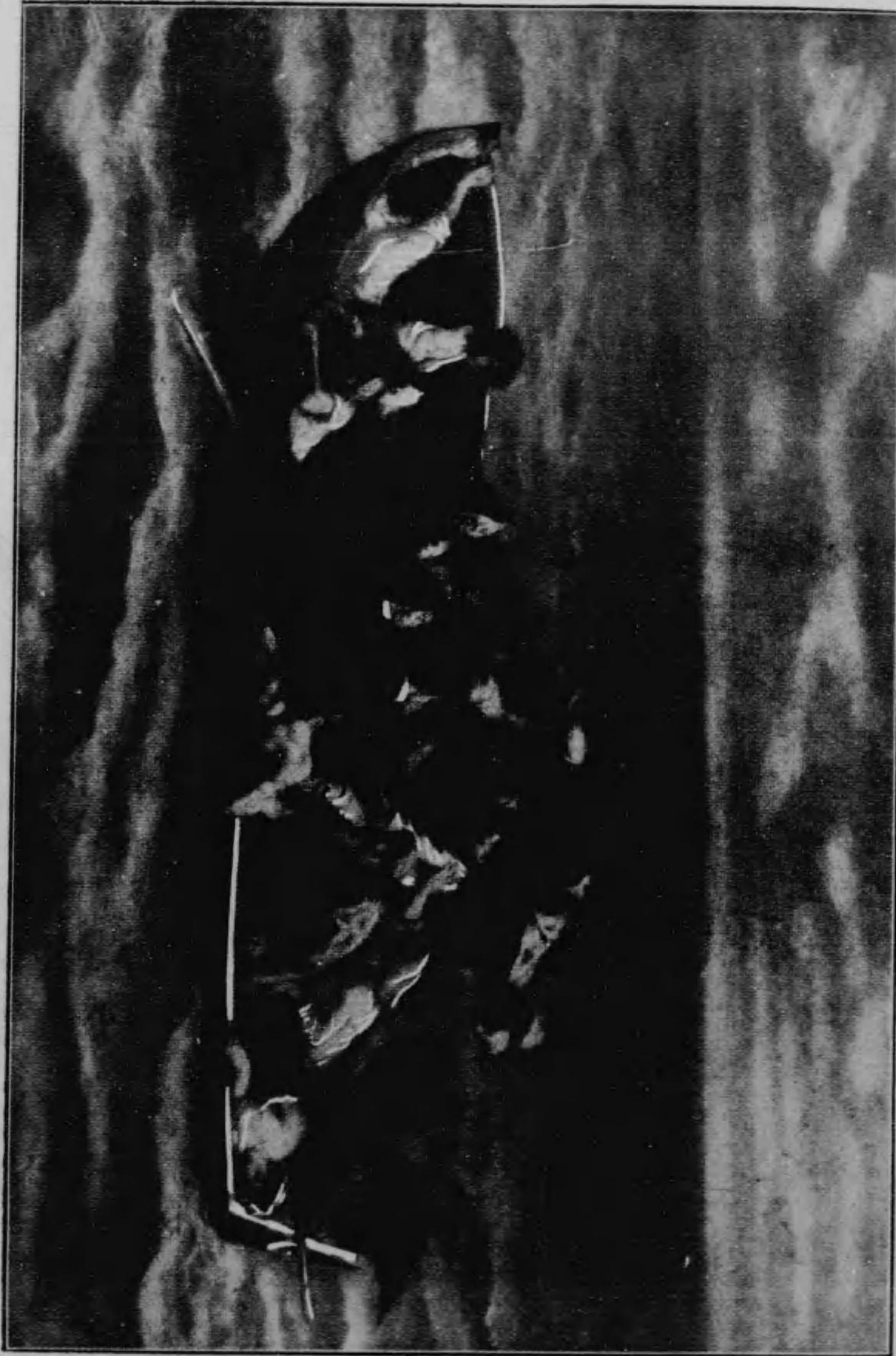
『その次ぎに注意すべき事は、文學が初めあり中頃がありそして終りのある話を展開させて行くこと云ふ事です。話は違つた幾つかの出来事を連結して、それから結末を引き出して来る。人々をして彼等のする行動の始末を見せ、それを行はせる。で、作り出され

る場景が話される順序に従つて力を得、それに何等の値打がない
迄も、仕組みの進行に資する一部とはなつてゐるのです。

『形體藝術の場合には之れと趣きを異にしてゐる。それでは、或る
動作の一面だけしか現はされない。よくそんなことをする人があ
るが、畫家や彫刻家が文藝の作家から主題を得ては好けないと云
ふのも此の點からです。残りの部分は知つてゐること、推察して、
或る話の一部分を表現する藝術家があるけれども、さう云ふ人の
作品はそのまゝ、作家の作品の上に腰を据へてゐなければ仕方がな
い。若しその後かなり先かきなりの話の事實に輝かされてゐるのなら
ば、さうして初めて全體の意味を持つ事になるのです。

『畫家ドゥラロッシュがシェークスピア、かその青臭い模倣者カシミル・
ドゥラボンニユか、に乗つ取つて「エドワードの子供達」をお互ひ
に持ちつ持たれつした上で現はす場合、それに興味を感じる爲め
には、子息達が王位の後繼者であること、彼等が牢屋に入れられ
てゐるのであること、そして横領者の手から放たれた僱ひの刺客
が今や彼等を暗殺に來やうとしてゐるのである事を知る必要があ
る。

『ドゥラクロア、——極めて平凡なドゥラロッシュの次ぎに名を引く事
を此の天才に謝しておくが、——ドゥラクロアが、バイロン卿の詩
から主題「ドン・ファンノイフアージュ・ド・ドン・ファンの難船」を探つて、暴風の吹き荒ぶ海上の小



舟、その水夫達は帽子の中から紙の小片を取り出すのに従事して
ゐるところを我々に示せば、此の場景を解する爲めには、之等
の哀れな人々が飢へ餓へて、此の中の誰が他の者達の餌食となる
ことになるか、それを知る爲めに圖を引いてゐると云ふ事を知る
のが必要になる。

『此の二藝術家は、文學的の主題を取り扱つて、繪畫と云ふものゝ
完全な意味を繪の上に齎らさない作畫上の誤りを行つてゐる。

『けれども、その中ドゥラロッシュの繪は、素畫が冷たく色彩が堅く、
受ける感じがロマンティックな狂言じみたもので善くないが、ドゥラ
クロアの方は賞讃に値してゐます。その理由は、此所に描かれて

ある小船は本當に深綠色の波に揺られてゐ、飢えと惱みとは難波船の人々の顔に痙攣を起させてゐる、そして色彩の陰殘に烈しい様さまが或る恐る可き罪惡を告げ知らせてゐるからです。——一言に盡せば、此の繪の中にあつてバイロンの話が間違つた物にされてゐるとしても、その代りとして明らかに火の様な粗大な、崇高な畫家の心が全的に此所に現はれてゐるからです。

『此の二つの例に依つて教へられる所はかうです。人が熟慮の結果藝術上に最も有意義のものと思へる一の禁止令を敷く場合、それに服従しないと云ふ理由の下に凡庸の人達を咎責する事は立派に出來るけれども、天才になると殆んど免罰と云つた工合にその規

定を浸害してゐるので、それを見た人は喫驚する事になるのです。』

ロダンの話してゐる間予は工房の中を歩き廻つてゐたが、氏の作品「ウゴリノ」の模型に眼を止めた。

莊嚴なる寫實的の彫像である。何の點にもカルボアの群像を忍ばせる所がない、云つて見ればそれよりも一段悲愴である。ピサンの擧げた所に由れば、カルボアの作品では、狂氣と飢へとその子供達の死を目撃した悲しみとに悩まされて、兩の拳を咬むのであるのだ。ロダンはそれよりも先きへ進んだ劇面を現はしてゐる。ウゴリノの子供達は死んで地上に横たはつてゐる。そして飢餓の痛苦より野獸

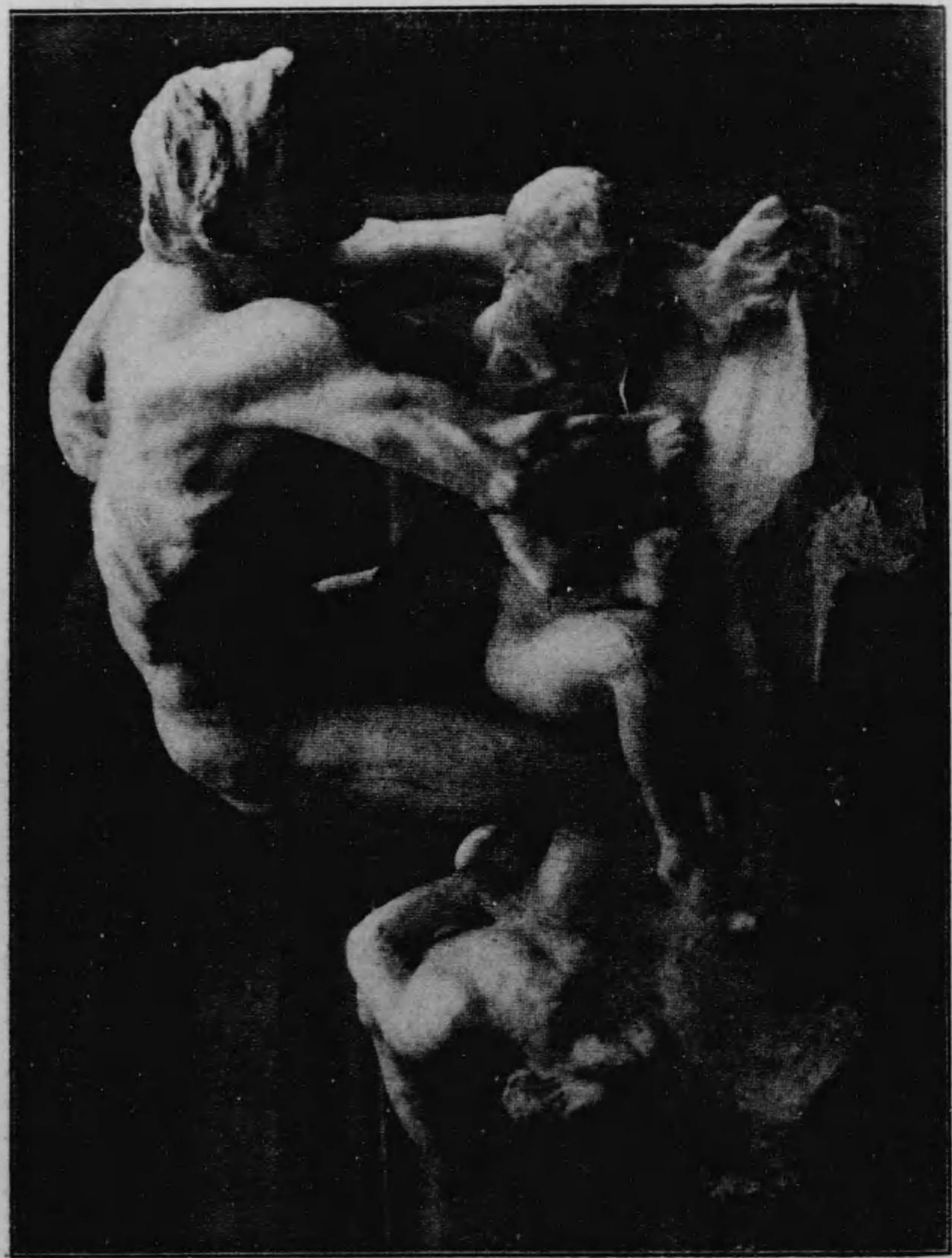
の心にされて了つたその父親は、腕と膝頭とで身體を子供達の死體の方へ曳きづゝて行く。で、死體の肉へと心を傾けてゐるが、同時にその頭を返してゐる。彼の中には食物を求めにかゝつてゐる野性と、此の氣味の悪い犠牲に恐怖の念を抱いてゐる考へある生きもの、愛ある生きもの、恐ろしい争闘が起つてゐるのだ。何物も斯くまで苛酷にはなれない。

予は云つた。

『此所にも、貴君のお言葉を確かめる爲めドン・ファンの難船につけ加へる可き一例があります。ウゴリノの悩みに就ての事々を再現する爲めには、明らかに「神曲」ダイヴァイン・コンディを讀んでゐる必要があります、

——が、ダンテの一節を知らないにもせよ、貴君の像の顔付や様子に表現されてゐる内面の闘争を前にしては、誰しも心を動かさないわけには行かないでせう。』
ロダンは口にした。

『文學的作物が非常に好く知れ渡つてゐる場合には、藝術家がそれに據つても尙且理解を待期し得る事は事實です。然しそれにも増して、私の考へでは畫家と彫刻家の作品とは、作品そのもの、中にあらゆる興味の個所を抱含してゐる方がよろしい。文學に助けを乞はないまでも、藝術に思想乃至想像を示す事は出来るのです。』
詩歌に依つて説き出された場景を用ゆる代りに、只々何等文學の



臺本をも要しない平明の象徴ばかりを必要とすれば好いのです。
かう云ふのが一般に私の手法となつてゐます。』

主人の云つた様なさう云ふ彫刻物は、その物言はぬ言語を揚言しながら我々の周圍に集まり寄つてゐた。極めて思想に充ちくゝてゐる多くの氏の作品模型を、予はそこに見たのである。

予は一つづゝその研究をし初めた。

予は「思想」の複製を賞讃した。原像はリュクサンブール美術館にあるのだ。此の不可思議な作品を想ひ起さない者があらうか。

それは女の頭像である。極めて歳若く極めて美しく、奇怪な程徴

細な優雅な面持をしてゐる。首は前方に傾^{かし}げて幻想の被りものに蔽はれてゐるが、殆んど無形の物の様にもなつてゐる。その前額に影を落してゐる輝く頭巾の一端は、彼女の夢想の翼とも見えてゐる。然もその首は、既に脛さへも重い厚い大理石の塊りの中に閉ぢ込められ、それからは自由になる可くもないのだ。

その象徴は容易く理解される。思想が生もなき事物の胸に擴がつて、それを彼女のかぐはしさに依つて輝かしてゐる、——が、彼女は重い現實の足枷^{あしづせ}から逃れやうとその甲斐もない努力をしてゐる。

次に予は「幻影、或ひはイカラスの娘」を前にした。若い天使の像である。彼女が大きな翼に空を切つて飛んでゐた時、烈し

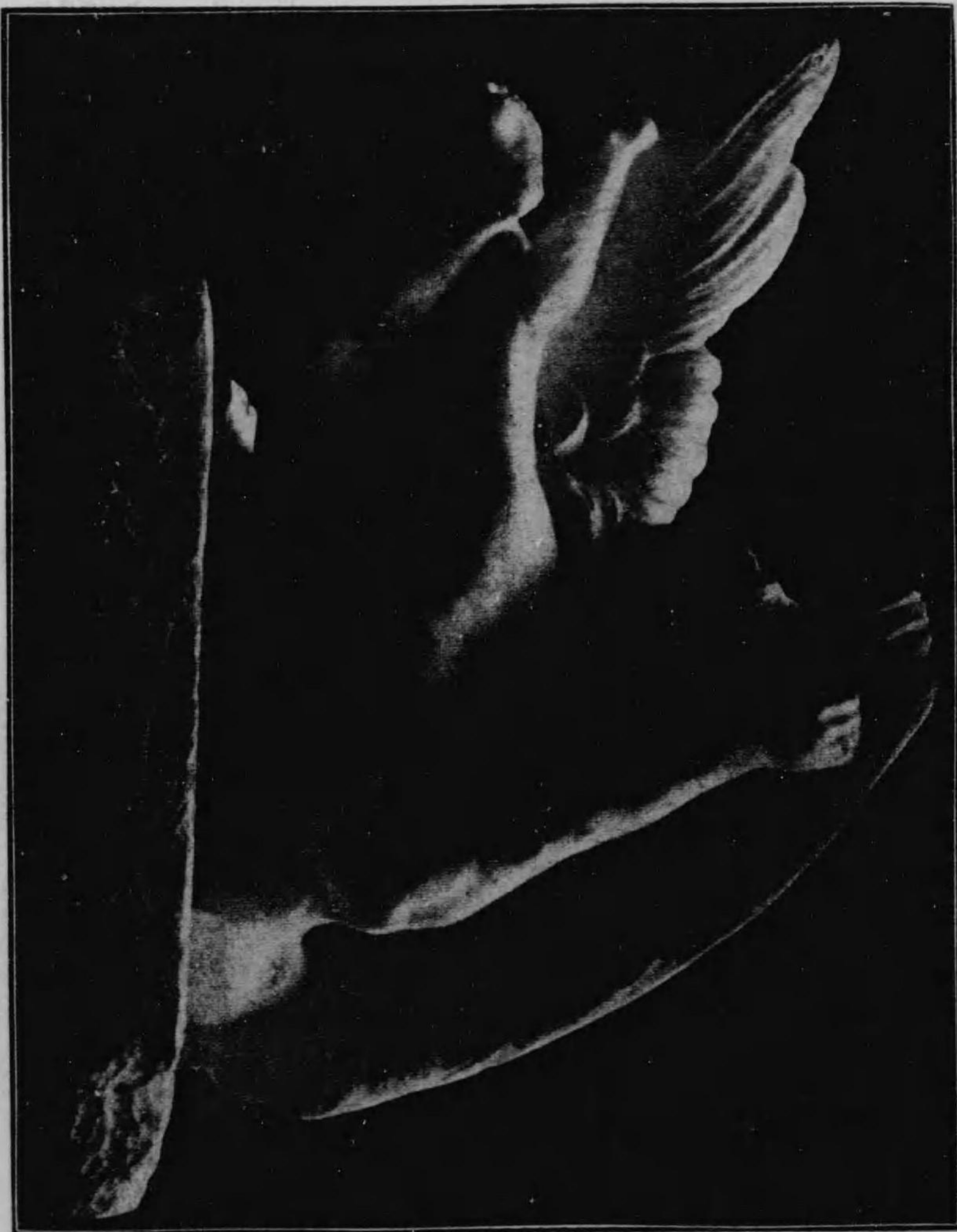
い一陣の疾風は彼女を地上へと吹き落したのだ、それで天使の美しい顔も岩に撃ちつけられた。けれどもその翼は、破れずに尙空を打ち、不死の天使も再び起き上つて地を離れ、又地に落ちて来る。時の終りになるまでもかう繰り返してゐるのだ。倦む事のない望み、幻影^{まぼろし}のする永遠の失意である！

そこで予の注意は、第三の彫像「ケンタウル^{（半人半馬）のもの}」に引かれて行つた。擱まうと切望してゐる兩腕も届く事のない標的の方へと、絶望的にあこがれてゐる神話的人體の胸像である、がその後足は大地にしがみ着いたまゝになつてゐ、殆んど泥土に蹲くまつてゐる重い馬の脇腹は自由に蹴上がる事も出来ない。哀れな毛ものにある二

つの本性の恐る可き對立が之れである。——心に映する幻影の清らかな衝動も、哀れ體軀の粘土に捕へられたまゝとなつてゐるのだ。

ロダンは云つた。

『かう云つた風の主題ならば、思想も容易く讀み取れる事と信じます。之等は一つも外ほかからの手助けなしに、觀者の想像を呼び起すのです。けれども、それを一小限内に限つて了ふ事にはならず、その想像に何所へでも好きな所へ持つて行ける手綱を與へてゐる。私の意見からすればそれが藝術に振られてゐる役割なのです。その創造し出す形體は、只一重に感情の限られてゐない發展に對し



て、或る掴まへ所を供給してゐなければならぬ。』

此の時予は、ピグマリオンとその立像とを現はしてゐる大理石群像の前に立つてゐた。その作家は温かい心に自分の作品をかき抱いた、氏の兩腕の中にあつて作品は生命に目醒めるのである。

ロダンは云つた。

『君を驚かして見やう。此の構圖の一番初めのスケッチを君に見せて上げる。』

で、氏は予を石膏模型の方へと導いて行つた。

言葉通り予は驚いた。ピグマリオンの話に就て、少しも係はりの

ない物であつた。角の生へて毛深い牧神が、息づかいも急しい水妖を掴まへてゐるのだ。大體の線條に大して相違はないが、主題は非常に違つてゐる。予の黙つて驚いてゐるのを見て、ロダンは興味を覺えてゐるらしく見えた。

此の黙示には幾分予も當惑して了つた。予の今も耳にしたり目にしてゐた凡てと反對に、まるで離れて主人は或る點から主題に自分身の説き明しをしてゐるのだ。氏は鋭く予を見守つた。そして云ふ。「之れは何時もさうだが、君は君の判断する主題を餘り重く見過ぎてはいけません。疑ひもなく、主題は主題の價值を持てゐて人々を魅する手助けをしてゐる。けれ共、藝術家の先づ第一に心懸けな

ければならない事は、自分が生命ある筋肉を造り出さねばならないと云ふ、此の事です。他は餘り問ふ必要もありません。

——で突然、氏は予の當惑をそれと察したので、語を續けた。

「今の終りの言葉が、以前に自分の云つた所と齟齬してゐる等と、君、考へてはいけません。」

「彫刻家は主題に係はらず、動氣うつ様な肉を現はす事のみを自分に限る事も出来る」と私が云つたからとて、それは彼の作品から思想を排除して了ふと云ふ意味になるのではない。又私が、その人には象徴を求めると云ふ必要もないと云つたからとて、之れも自分は靈的の價值を藝術から除き去る流派の者だと云ふ意味ではない。

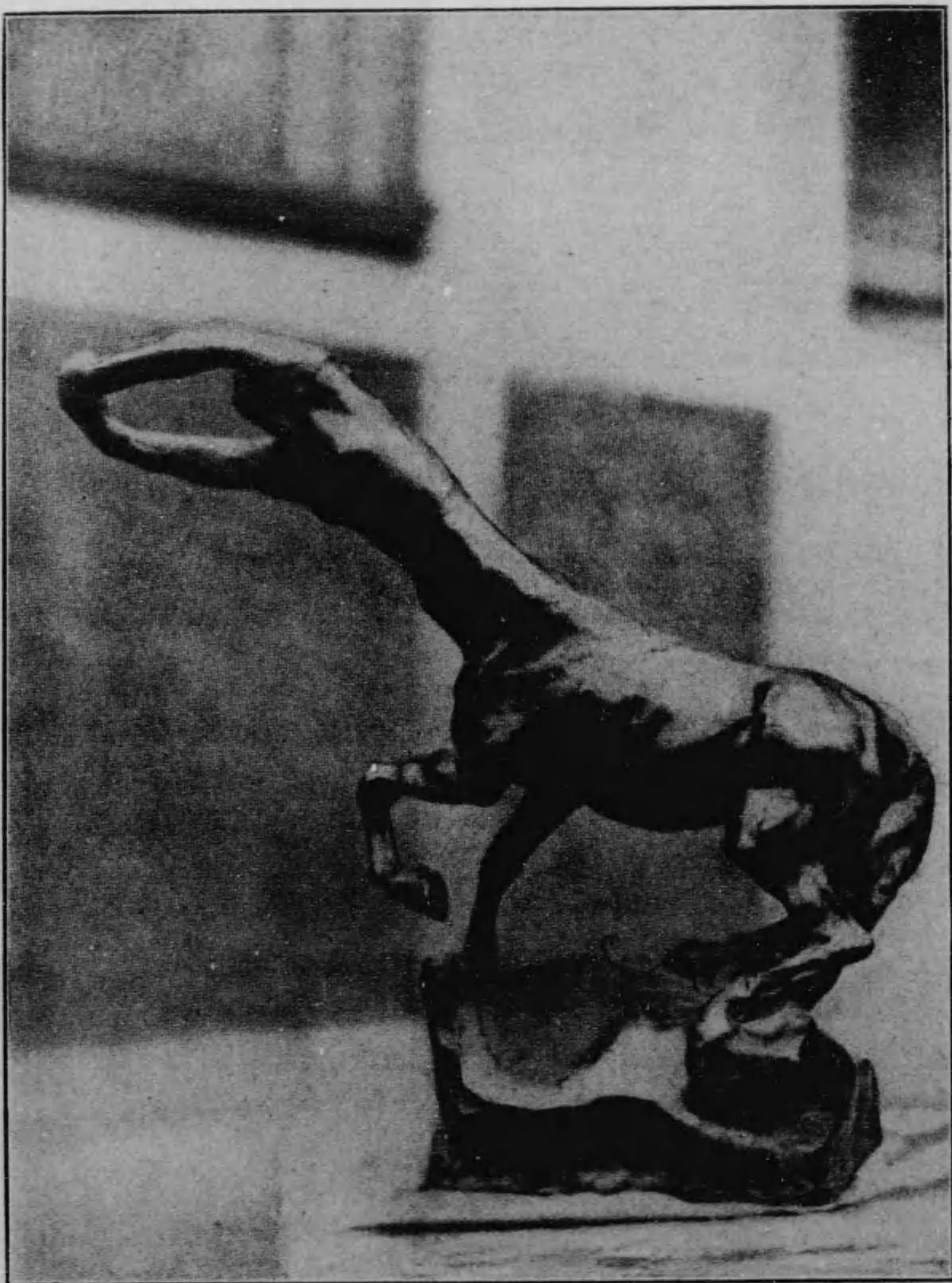
「何にせよ、實を云へば凡てのものが思想なのです、凡てのものが象徴なのです。で、人間の形體なり様子なりはその心靈の情感を差し示してゐるのです。體軀は、その内に包んでゐる心靈を常に表現してゐるのです。見る事の出来る者にとつては、裸形も極めて豊富な意味を示してゐる。アウトラインの崇高なリズムの中に、大彫刻家例へばフィディアスの様な人は、聖らかな智恵に依つて大自然のあらゆる所に流れ波打つてゐる諧調を認識するのです。静寂な、平均を保つて力と秀美とに輝いてゐる單純なトルソーも、彼をして世界をも統治する千萬の力に充ちた心を忍ばせる事が出来るのです。」

「親はしい風景も只々その感じさせる氣持の好きばかりで現はれるものではない、その呼び醒ます觀念に依つて現はれて來るのです。線條や色彩も、線條や色彩としてだけで人を動かすのではない、その内面にある深奥な意味に依つて人を動かすのです。樹木の影シレットや地平線の線條にも、リュイスデール、キューブ、コロ、テオドル・ルーソー等の大風景畫家になれば、それぞれの性格に従つて——例へば莊重とか華美とか、勇氣強く或ひは力を落して、乃至は平和に或ひは惱み多いさま様に、——或る意味を觀取するのです。」

「これは感覺に充ちた藝術家が、自分の様に出來てゐない物は何一

つとして想像する事も出来ない上から起る事なのです。彼は自分自身と善く似通つた偉大なる心が、大自然の中にもあるものと想ひ見てゐるのです。生命あるものも静物も、空中に浮ぶ雲も野にある緑の若草も、一つとして藝術家の爲めに、あらゆる物の中に匿されてゐる偉大なる力の秘密を保つてゐない物はない。

『藝術の傑作を見れば、それにあるあらゆる美も、それを創造した人達の宇宙に見る事が出来ると信じてゐた志向、その思想から出て來るのです。何故ゴシックの寺院が美しいのであらう。それも其所にあるあらゆる生命の預感、その門を飾つてゐる人の形像乃至は柱の頂點に施ほどこされてゐる裝飾の仕組みに至るまで、その各々



の影に人が聖なる愛の足跡を見出し得るからに依つてです。之等の温雅な中世紀の工匠達は、何所にも無限の善の輝きを見てゐた。で、彼等は人を引き付ける心の善さを持つて、自分達の恵み深い悪意が貸しにもなつてゐる悪魔の顔にさへ此の凡てを愛するやさしさの影を投じ、そして、天使とも血續きになつてゐる様な氣分を持つてゐた。

『大家の筆になつた繪——例へばティシアンなりレムブランドなりの繪を見て見玉へ。ティシアンの描いた君主には凡て矜り顔な精神的な所を見出すが、疑ふ迄もなくそれは作者が作者自身を描き生かしたのです。そのふくよかな裸形の婦人達は、自分の秀越に確

信を持つて愛重するがまゝに自分達の身を投げ出してゐる。莊嚴なる樹木に美化され、凱歌を奏する様な日没に紅く染められてゐる彼の風景畫も、その人物畫と倨傲の點に劣りはしない。あらゆる創造物の上に彼は貴族的豪華のしるしを敷いたのです。それが不斷に此の天才にあつた思想なのです。

『もう一つの矜りはレムブランドに描かれて、皺の寄つてくすぶつた職人の顔を輝かしてゐる。彼は煙つぽい屋根裏と、瓶の底を窓硝子にした小さな窓とに位くらゐをつけた。又味もなく田舎びた風景をフトした美に輝かし、銅版の上でエッチングの針が非常に快よく仕上げたその茅葺屋根をも、彼は高貴のものとしたのです。彼を引

き付けた物と云ふのは、謙讓の美はしい勇氣や、誠まことの心から物を愛する者だけに在る事物の清淨、それと宿命を正當に受領し成就する壯大な謙遜の心等でした。

『且大藝術家の心は極めて活氣に充ち極めて深奥で、如何なる主題の中にもその心は心そのものを現はすのです。それを示すのに、全形を持つて來る必要等はない。傑作ならばその如何どんな一部分を取つて見ても、人は其所にそれを造つた人の性格を認めるのです。若しやつて見る氣があつたら、ティシアンとレムブランドの二人に描かれた肖像畫にある手を比較して見玉へ。ティシアンの方の手は大風大風だが、レムブランドのは控へ目で勇氣に充ちてゐる事でせう。

此の限られたる繪の一小部分にも、之等大家達の凡ての思想が含まれてゐるのです。』

此の藝術の靈性にある眞條に就ての明言を聞いてゐると、予には或る異議が唇に浮んで來た。で予は云つた。

『先生、繪畫と彫刻とに深甚の思想を暗示する力のある事は誰しも疑ひを入れません。けれ共多くの懷疑家は、元來畫家なり彫刻家なりは思想を持つてゐない、思想をその作品に入れるのは我々自身であるとしてゐます。それで、恰かも自分自身では少しも自分の豫言する所を知らずに、神の託宣を傳へる倚り物に依つて動く』

神巫みこの様に、藝術家も亦純なる本能に依つて動くものと信じてゐます。が貴君のお言葉だと、少くも貴君の手は貴君の心に導かれてゐる事を證してゐる。果してあらゆる大家がさうでせうか。常に大家達は自分の作品に思想を入れるのでせうか。賞讀者達が自分の作品に見出す所に就てのハッキリした意見を、果して何の時代にも大家達は持つてゐるものでせうか。』

ロダンは微笑しながら云つた。

『お互ひに理解し合ひませう。全く思ひも寄らない志向を、此の藝術家にはそれがあるとして指差す頭腦の複雑した批評家もない事はありません。が、我々の話し

合つてゐるのは、さう云ふ人達に就てではないのです。君は然し、何時の時代にあつても大家達が自分のやつてゐる所に就ての自覺は持つてゐると云ふ、此の事には合點がいつてゐるでせう。

——氏はそこで頭を擡げて、

『君の云ふ様な懷疑家達も、藝術家が物を表現する爲めには何の位ひの精力を要するか、又微弱にもせよ偉大なる力と云ふ點に就て何う考へてゐるか何う感じてゐるか、と云ふ事だけでも知つてゐる以上は、繪畫乃至彫刻から輝き出て、來るあらゆるものが、かくあれと望まれたものになると云ふ事に疑ひは入れますまい。

——暫くしてから語を續けた。

「手短かに云へば、形にも線にも色彩にも表現的でない餘計な所が少しもなく、何れの部分、——實にあらゆる部分が、思想と心靈とを表現してゐる物を稱して、最も至純なる傑作と呼ぶのです。

『けれども、大家が自分の理想とする所まで自然を仕生かす場合、自分自身を欺くと云ふ事もあり得るでせう。その理由は多く無關係な或る力に統御されたか、或ひは我々の知解にはその思はくを洞察し得ない意志に依つて統御されたかなのです。要するに自分の想像通りに萬象を現はすに際して、藝術家は自分の夢を式で示すのです。大自然の中に自分自身の心靈を讚美するのです。それで人類の心を豊富にして行くのです。自分の心靈を以て實體の世



界に色彩を施ししながら、待ち構へてゐる人々に思ひも寄らない
千萬の感情の影を示して見せるからです。彼は人々の中にあつて
それまでは知られてゐなかつた多くの寶を見付け出すのです。人
々に生活を愛する新らしい條理を與へ、人々を導く可き内面の光
を與へるのです。

「藝術家は、ダンテがゾーデルに就て云つた様に「彼等を導く者で
あり、彼等の恩師であり、そして彼等の友である」のです。

第九章

藝術上の神秘

第九章

藝術上の神秘

ある朝、予がムードンのロダン氏宅に着くと、氏は寢衣を着て頭髪も亂れ、足にはスリッパを履いて快よい火のほとりに座つてゐた。十一月のことである。

氏は云つた。

『一年の中で、自分の病氣になつても好い時が來ました。今までは二六時中澤山の制作をし、澤山に仕事をし、大變に心づかひもして

一寸の間息つく暇もなかつた。その疲れが高じ果てゝも、よしや強情にそれに打ち克たうとして戦ふ迄も、何しろ歳の暮れになると私は二三日仕事を休められて了ひます。』

氏の言葉に耳を傾けてゐる中にも、予の目は壁に懸かつてゐる大きな耶蘇受難像に止まつてゐた。それには人體四分の三大の基督がかゝつてゐる。極めて惱みに充ちて寫實の、美しい彩色彫刻であつた。體軀は木に懸けられて、再び生き返る力もあるまいと思はれる程死に絶へてゐる様に見える。——一點の缺ける所もなく完成されてゐる神秘的犠牲である。

予の注視する所に従つて氏は云つた。

『君はその受難像に感心してゐるんですね。驚く可きものでせう。さうではありませんか？その寫實は、ブルゴのチャペル・テル・サン・ディシポ・クリストの基 督 教 會 堂にある——動き出し想な恐ろしい、全く氣味の悪い、本當の人間の死屍を見る様な形象の——受難像を想ひ起させます。此の基督の形は餘程殘忍なところを缺いてゐる。見玉へ、體軀からだと兩腕との線條の調和、その交り氣もない氣持は如何でせう！』

主人が默想の境に走り入つてゐるのを見て、若しや氏が宗教的な氣分であるのかと、それを予は尋ねて見た。

氏はそれに答へて云ふ。

『それは宗教的と云ふ、その言葉に君の下す意味次第ですが。——
例へば君が宗教的と云つて、或る教へに従ふ人又は或る教義の前
に頭を下げる人の事を意味するのならば、明らかに自分は宗教的
ではない。』

『自分にとつて宗教と云へば、教理の條々を口に説へるよりも以上
のものです。世界にあつて説明された事のないもの、又疑ひもな
く説明することの出来ないあらゆるものを、宗教と云つて意味す
るのです。普遍の法則を保ち支へ、あらゆる生きもの、形かたちを保持
してゐる不知の力を崇尊することです。自然にあつて、官覺の領
域へは下ちて來ないあらゆる物を推測することです。肉體の眼に

も心靈の眼にも、認める事の出来ない廣大なる事物の王國がそれ
です。無限界、永遠界、限りなき智慧と愛——勿論空幻に假定す
るものではあるが、此の生活にあつては我々の思想に翼を與へる
もの、——に對して、我々の自意識に衝動を與へる物がそれです。
此の意味でならば自分は宗教的である。

——ロマンは素早く燃ゆる火の焔のゆらぎを少しの間追つてゐた
が、やがて語を續けて、

『若しも宗教と云ふものが存在してゐないならば、自分はそれを創
造し出さなければならぬ筈です。つゞめて云へば、本當の藝術
家と云ふのは、人の中でも極めて宗教的な人のことです。』

France Paul Marce
Voland (2)

『我々は只に官感を通して生活してゐるのみである、そして現はれてゐる世界のみが我々の役に立つ物であるとは、一般に信じられてゐるところだが、さうして我々は、種々様々の色どりに酔はされて人形を見る様に事物の形を面白がつてゐる小兒と混同され、誤解されてゐるのです。我々にとつて色彩乃至線條は、匿されてゐる實相の象徴となつてゐるに過ぎない。我々の眼は表面を潜つて事物の眞意ある所まで迫つて行き、我々が形體を再現して了へば、その蔽ふてゐる靈的の意味を再現されたる形體に付與するのです。

『讀^だへるに足る可き藝術家とは、大自然のあらゆる眞理を表現する



者でなければならぬ。只に外がはの眞實ばかりではなく、尙それにも増して内面の眞實を表現しなければならぬ。

『善き彫刻家がトルソーを象かたちづくる時、彼は只に筋肉の再現をするばかりではなく、筋肉に生氣を與へてゐる生命をも表示する。——生命以上のもの、即ち筋肉に形を付け、それと相通じてゐる力をも表示する。それは、秀美或ひは強さともなり、多情の艶美ともなり、又御し難き意志ともなるでせう。』

『ミケランジェロの作品に見れば、創造的な力がその中にどよめいてゐる様にも思へる。又ルカ・デラ・ロビアの物に見れば、それが聖らかに微笑してゐる。かうして藝術家は、各自その性情の甲乙に従

ひ、恐ろしいなり柔和なりの心靈を大自然に貸してゐるのです。

『風景畫家になれば云ふ迄もなく以上に突き進んでゐる。只に生きてゐる物のみには止まらず、風景畫家は樹木や、草や谷や丘に迄も普遍的な心靈の反映を見取るのです。他の人々には單に木と土として現はれ^れものも、大風景畫家には偉大なる生きもの、顔として寫るのです。コロは樹木の幹、野に生ひ立つ草、乃至は湖水の鏡にも似た水の中にも柔しさを觀た。然もミレーはその同じ所に苦惱を見否定的の心を讀んだのです。

『何所にも大藝術家は自分の心靈に答へる靈魂の返事を聞く。之れを他所にして何所により以上の宗教的な人を見出し得やう。

『彫刻家が自分の研究する形體に壯大なる性格を認める時、——急走してゐる線條の中にあつて、あらゆるもの、永遠の型體を如何にして掴まへるか云ふ、その事を知つた時、——神性そのもの、吐息の中から、生命ある者の凡てが依つて形造^{かたち}られてゐる不變の原型を認別したとも思はれる時、——かう云ふ時々^{時々}に當つて彫刻家は禮拜の動作をも行ひはしないでせうか。例へば、人體と動物とに限らず、エヂプト彫刻家の傑作を研べて見玉へ。で若しその要素的な線條の抑揚が、神聖なる讚美歌の氣分を現はしてゐない場合には、自分にさうお云ひなさい。總括的な形體の才能を惠まれてゐる藝術家、云ひ代へれば形體の道を追ふ論法に、少しも

その生き／＼した實相を失ふ事なく調子を付けて行ける才能の恵まれてゐる藝術家は、誰しも等しく宗教的な情感を呼び起させます。それはその藝術家自身が不死の眞實の前にあつて感じた叫び聲を、我々に又傳へてゐる上からです。』

予は云つた。

『ファウストが不可思議な「母達の王國」を訪ねて、消へることのない大詩人達のいろ／＼な女主人公と語を交へ、現世にある眞實の生産的なあらゆる思想を看た時におのゝいた、あの戦慄にも似てゐます。』

『莊嚴な場景ではありませんか。』

——と、ロダンが聲を高めて、

『又何と云ふ廣大な幻想を持つてゐたのでせう、ゲーテは！』

——で語を續けた。

『神秘と云ふものは、大家の秀れた作品を浴させてゐる或る大氣とも云ふ可きです。』

『大家は云ふ迄もなく、自然の面前にあつてその天才の感じた所を悉く表現してゐる。彼等は自然の裡に人間の發見し得る最大限の秀越と透徹とを以て、大自然を現はしてゐる。のみならず、彼等は

隨所にあつて我々の見知つてゐる小さい世界を抱合する「見知らざる世界」の方へと、尙も我が身を擲つてゐる。歸する所、自分達は只々我々に限られてゐるもの、我々の心なり官覺なりに印象する物きりしか、認めもしなければ感じもしないのです。その他の凡ては無限の幽暗な境へと走り去つてゐる。例へば千萬の事物が、我々にハッキリ判る可きである迄も、我々はそれを掴む様にと構成されてはゐないので、みんな匿れて了ふのです。』

ロダンは語を止めた。そして予は、ギクトル・ユーゴの詩の數行を想ひ浮べ、それを繰り返した。

* “ Nous ne voyons jamais qu'un seul côté des choses ;
L'autre plonge en la nuit d'un mystère effrayant ;
L'homme subit l'effêt sans connaître les causes ;
Tout ce qu'il voit est court, inutile et fuyant. ”

『此の詩人も私よりは善く取り入れてゐる。

——ロダンは云つて、微笑しながら、尙後を續けた。

『人類の持つてゐる知解と誠意との、最も高い確證ともなる可き藝術の偉大なる作品は、人間と世界とに就て云ひ得可き事を悉く云ひ盡してゐる。その上、それ等は未だ以上に知る事の出來ないも

の、ある事を教へてゐる。

『秀れたる作品は何れも此の神秘の性質を藏してゐる。人は常に小さい「美しい氣迷ひ」を見出すのです。あらゆるレオナルド・ダ・ヴィンチの繪の上に立ち迷つてゐる、疑惑の調子を想ひ浮べて御覽なさい。が、此の偉大なる神秘を例に引いたのは私が悪い、彼は私の云ふ題目を易々と説き明してゐますから。それよりも、デュルチオネの「野の奏樂」を例證する事にしやう。之れにはあらゆる生活の快よい喜びが現はれてゐる。けれども、之れに加へて憂鬱な熱狂がある。人間の喜びとする所とは何であらう。それは何所から來て、又何所へと去るのだらう。生存と云ふことの謎です！』

『再び、君が望むならミレーの「落穂拾ひ」を例に引いて見やう。地平線より昇つて地平線へと沈んで行く輝き返る太陽の下に、烈しく働いてゐる女達の一人。その頭胸の中に、底の底に沈んでゐる心から閃き出でた或る疑問のある事を我々は感じますが、その意味する所は一體何だらう。』

『偉大なる作品と云ふ作品の上に漂つてゐる神秘がそれなのです。が、之等の生ある者を惱ませるが爲めにのみ生存と云ふ事と結んでゐる、その法則の意味する所は何であらう。如何に苦しめばとて、彼等をして生活に愛着させてゐるその永遠の誘惑の意味する所は何なのであらう。心を掻き亂す問題ではありませんか！』

『此の神秘の印象を導き出す物も、只に基督教文明の時代に屬する傑作ばかりではありません。古代藝術の傑作に對しても之れは感じるので。例へばバルテノンにある「三つの運命」の前にあつても。多くの學生達の意見に依ればあれは他の神々であるとしてゐるが、自分のあれを呼んで「運命」とするのは非常にその名が相應しいからです。どちらにせよさして違ひはない。只單に三人の女が座つてゐると云ふ丈けなのだが、そのポーズは極めて靜寂に莊嚴に、何となく我々には見えもしない圖抜けて大きな意味のあるもの、話しをし合つてゐる様に思へる。あの作品の上には壯大なる神秘、全自然をも從へる無形に永遠の「條理」が、ひどい力を振つ



てゐる。で、作品はそれ自身その天上界での下僕となつてゐる。
『かうして、あらゆる大家達は我々を「知る可からざるところ」に別
れて了ふ關門の方へと突進してゐる。その中には、關門に衝撃して
無残にも傷ついた者もある。それよりも元氣の好想像力を持つ
てゐる他の者は、その關門越しに秘密の園を住居とする小鳥の調
子も好い歌が聞へて來ると想像してゐる。』

氏が藝術上の極めて高貴なる考へを予に傳へてゐる主人の言葉
に、予は注意深く耳を澄ましてゐた。氏の身體に災わざはひひして、焰の立
ち上る爐の前に彼を休ませやうとしてゐた疲勞も、氏の心からは逃

れ去つて今は反對に極めて自由に、心を情熱深くも夢想の中に彷徨さまよはせやうとしてゐる様に見えた。予は氏自身の作品の方へと話を運んで行つた。予は云ふ。

『先生、貴君は他の藝術家達ほかの事をお話しになつてお自分の事には口を噤むでおゐるで、すが、貴君も亦非常にその藝術へ神秘を取り入れてゐられる一人です。見難きもの乃至は解説し難きものゝ惱みは、貴君の彫刻細片にも示されております。』

氏は反語の色を帯びた一瞥を予に投じて云つた。

『親しいグセル。』

例へば自分が或る感情を自分の作品の中に入れたにした所で、それを言葉に云ひ現はす事は全然不必要です。何故と云つて、私は彫刻家であつて詩人ではない。見る人は容易く自分の彫像の中にそれを讀む可きわけです。でないとすれば、つまりは感情と云ふ點で私が何も行はなかつたに等しい。』

『成程左様です。それを見出すのは公衆の仕事です。では、貴君の靈感の中から私の見出した神秘を、残り無くお話しする事にしませう。私が正確に見てゐましたら、さうおつしやつて下さい。私にはかう思へますが、人間に就て分けても貴君の興味を引いてゐ

る點は、心靈と體軀とを結び付けてゐる不可思議な不安さにあるのでせう。

『貴君の彫像には、何れに限らず心靈の理想へと向ふ等しい衝動が見られます。それは、肉の重さと怯懦とは係つてゐないものです。』

『貴君の「洗禮者ヨハネ」に見れば、重く肥大と云つた方の體軀は、地上にあつては凡ての限界を超絶してゐる聖職に依つて、力をつけられ眞直ぐにさせられてゐます。又「カレーの市民」に見れば、不滅の生に喘いでゐる心靈は逡巡する體軀を殉難へと引き立てゝゐる、然もかたはら「震へおのゝいてゐる卑しき肉よ、」との言葉を叫んでゐる様に思へます。』

『考へる人』即ち默想は、孤獨を掻き抱く恐ろしい努力の下に力強い體軀を狭め曲げ壓碎しております。「接吻」にあつて二つの體軀は、二人の心の願つてゐる融合歸一の實現が不可能である事を次第に感じてゐるものゝ様に震へてゐる。「バルザック」を見れば、此の素さまじい幻想にかられたる天才は、その頑丈な體軀を揺り、それを不眠症に陥入れそして漕刑罪人の苦行に追ひやつてゐる。私の云ふ通りでせうか、先生。』

『君の云ふ所に反對はしません。』
念を入れてその長鬚を撫でながら氏は答へた。

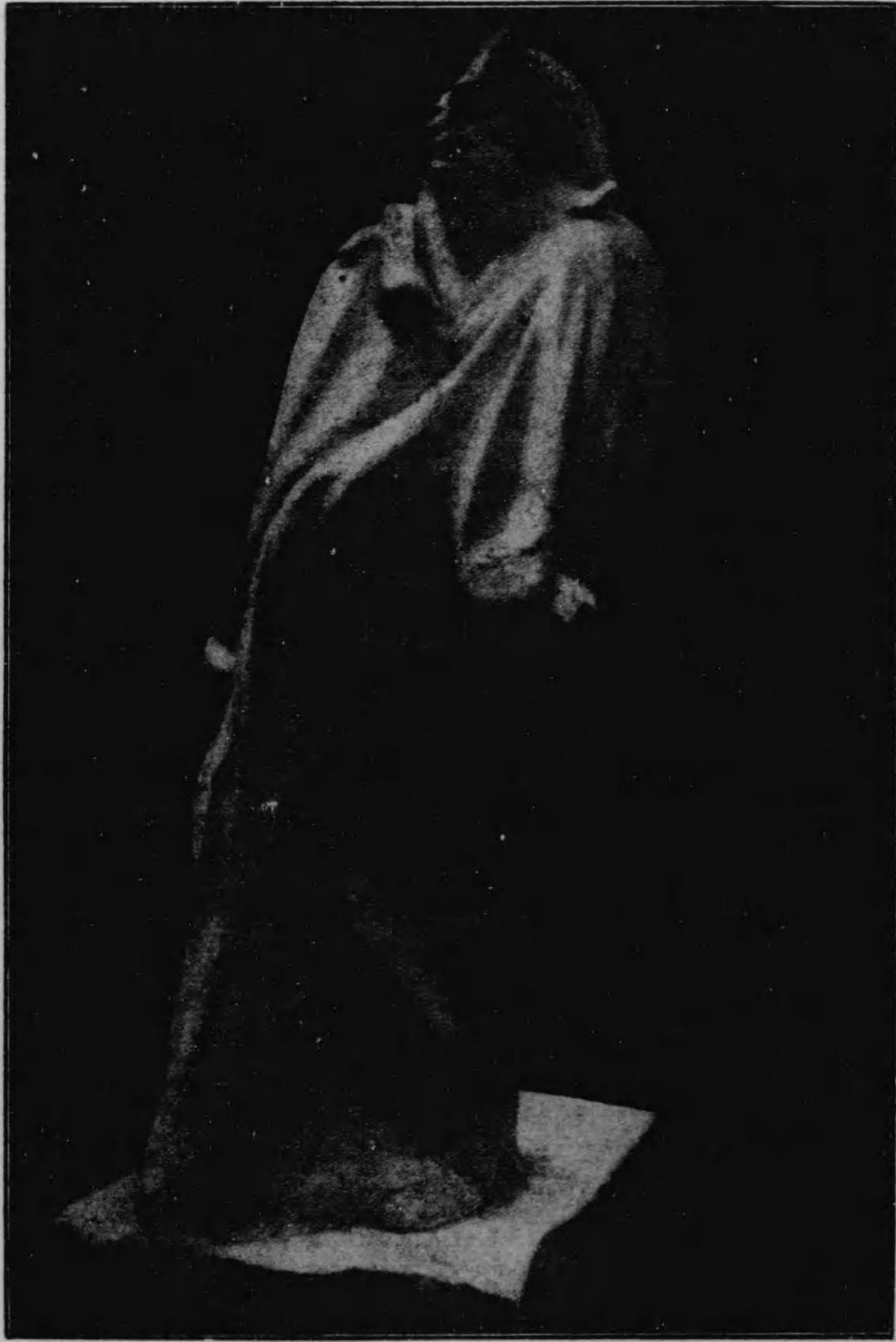
「貴君の胸像には、殊更に云ふ迄もなく貴君は錯綜する事物の状態に面と向つてゐる心のあはたしさを示しておるでいす。殆んどその凡てが此の詩句を想ひ起させます。

· Ainsi qu'en s'envolant l'oiseau courbe la branche,

Son âme avait brisé son corbeil !

292

「貴君は凡ての文士を、恰かも彼等が自分の思想の重さの下になつてゐる様に、首を傾げた形姿にして現はした。貴君の藝術家に就て見れば、みんな真直ぐ大自然に眺め入つてゐる。然しみんながみんなやつれて凄く見えてゐる。それは、彼等の幻想が彼等を導



Handwritten note in cursive script, possibly reading: "I am sorry to write to you."

「て、見る事も出来ない程な遠方、表現する事も出来ない位な所へと連れて行くからです。」

「恐らく貴君のお刻みになつたもの、中でも最も美しい物となつてゐる、リュクサンプール美術館の婦人の胸像は、例へば心霊が眩暈めまいして夢の深淵へと沁り入つて行くもの、様に、身を屈かめよろめいてゐます。」

「之れを要するに、貴君の胸像は一再ならずレムブラントの肖像畫を想ひ起させます。等しく此の和蘭の大家も、上から落ちて来る光に依つて人物の顔を明るくし、そして平易に無限をも忍ばせてありますから。」

『自分をレムブランドに比較すと等とは、瀆聖も甚だしい！』

——早口にロダンは叫んだ。

『レムブランド、あの藝術の巨人像に！君、考へても御覽なさい。

我々もレムブランドの前には頭を下げるのです、決して誰をもその傍らそばに置き等してはいけない！』

『だが君は、私の作品に見る心霊の、云ふ迄もなく空幻の物ではあるが、限界なき真理と自由との王國に向ふ動靜を觀察して、正しく決める所を決めました。其所には勿論自分を動かす神祕があるのです。』

——少時の後氏は尋ねた。

『もう藝術も宗教の一種であると云ふ事に合點がございましたか？』

『え、解りました。』予は答へた。

そこで氏は、苦味にがみを帯びた調子に語をつづけた。

『然しこれを行なはうとする者にとつて、先づ第一に此の宗教の戒める所は、トルソーを造るには如何するか、如何にして一個の腕、一個の足を造るか、それを知る事にあると云ふこの點を、心に記するのが極めて必要なのです。』

* 我々は只に事物の一面だけしか見る事はしない。——他は夜に神祕の中に走せ入つてゐるのだ。人は原因を知らずに結果を苦にしてゐる。それも

彼が早計に見、無益に、ホンの一瞬しか見ないからである。

** 飛び去らうとして小鳥の枝を曲げる時には、さうして心がその身を傷つけるのだ。

○ 第十章

フィディアスコミケランヂエロ

第十章

フィディアスとミケランヂェロ

或る土曜日の夕方ロダンは予にかう云つた。

明日の朝ムーロンの工房へ来て御覽なさい。二人でフィディアスとミケランヂェロとの事を話ませう、で、君の爲めにその双方の主點に就て私が小さい像をこしらへやう。さうすれば、君には忽ち此の二つの靈感の間にある本當の相異點、と云ふよりもつと好く云ひ現はせば、この二人を分けてゐる反對の性格がしつかり擱

めるでせう。』

ロダンに依つてフィディアスとミケランジェロとが判断され註解される！その會見の時間に丁度好く予の行つた事は云ふ迄もあるまい。

先生は大理石のテーブルの前に座つてゐて、粘土もそこに持つて来てあつた。冬の事でもあり、大きな工房にも火の氣が無かつたので、予は先生が風を引きはしまいかと心配した。が、予がこの事を注意すると助手は笑みを含んで、

『お働きの時に限つてそんな事はありません。』
と返事をした。

先生が粘土を捏ね初めるとその身體に熱が出て來たのを見て、予の懸念も消えてしまつた。氏は予にそばへ座るやうにと云つた。机の上に粘土の玉を丸めながら、氏は素早く像をこしらへにかゝつた。さうしながらも予に話しかけてゐる。

氏は云つた。

『此の一番初めの像は、フィディアスの意想にあるものとなるのです。この人の名を口にする時、自分は實にあらゆる希臘彫刻の事を考へてゐるのです。希臘の彫刻はフィディアスの天才に依つて最高の表現を見出した。』

粘土の像は次第に形になつて來る。ロダンの手は粘土の小片を加

へながら行つたり來たりしてゐる、大きな手掌てのしらの中に粘土をおいて手早く正確な動作の下にそれをするのだ。それから、拇指や他の指の仕事をする番になる。只一歴して足を造り、臂を圓め頭を造る。さう云ふ凡てを恐しい程な早さの下にするのだ、殆んど氏が手品を使つてゐる様にも見える。時に依ると先生は少しの間手を止めて、自分の作品を研究し、考へ、かうと決斷をつける、で、自分の考へをぐんぐん遂行して行く。

予はかく迄に手早く仕事をする人を見た事がない、明かに心と目の正確な事は、大藝術家の手を容易く動かす事になるのだ。それは只魔術師の巧みなすばやさ比較的出来る計りである。もつと好い

職業と比較して見れば、優れた外科醫の巧みさに比らべられるのみである。で、この容易く仕上げる事も、正確さや強さを失ふ事はなくそれ等をも含有して、その結果うはべかりの巧うまさに走る様な事は決してない。

予がこの事を考へてゐる中、ロダンの小像には生氣がついて來た。それはリズムに充ちくゝてゐる。一方の手は臂に、左方はその傍にしなやかに垂れ、首を傾かしげてゐるのだ。

先生は笑ひながら云つた。

『この早く造つたスケッチが、古代彫刻同様美しいなど、考へる様な

ことはしません。けれども、これの古代彫刻のかすかな觀念を君に與へてゐる事は解るでせう。

『それは希臘大理石像の模寫であると斷言出來ます。』と予は答へた。

『さうです、ではこれを調べて、この類像が何所から起つて來たか、それを見やう。この小像は頭から足にかけて二つづゝ相對してゐる四つの面を示すのです。』

『肩と胸との面は左の肩の方へと導かれてゐる、——像の下半身に
ある面は右側の方へと引かれてゐる、——兩膝の面も亦左の膝の

方へと導かれてゐる、と云ふのは、傾いてゐる右足の膝が左足の方へと寄つてゐるから。——そして最後にその同じく右の足は左足の後になつてゐる。で、再び繰り返へして云ふけれども、私の像の中には四つの方向を注意する事が出来る。像の全身を通じて、それが極めて柔かな起伏を現はしてゐるのです。

『この靜かな人を引き付ける印象は、等しく像の平均からも與へられてゐる。首の中心を通じて下りる垂直線は、全身の重さを支へてゐる左足の内踝骨へと落ちる事になる。それに反してもう一方の足は自由である。——只その足指が地に觸れてゐるに過ぎず、只補助として力を添へてゐるに過ぎない。少しも平均を破る事なし

にそれを上へ揚げる事も出来るのです。この姿勢は不羈奔放の氣持と秀美とに充ちてゐる。

『もう一つ注意すべき事がある。

トルソーの上部は、身體を支へてゐる足の方へと傾いてゐる事です。かうして、左の肩は右よりも低い水平線になつてゐる。がこれに反して、姿勢全體を支へてゐる左の臂は、上り且出張つてゐる。で像身のこの方の側では肩が臂に近くなつてゐるのに、他方に行く上つてゐる右の肩は下つてゐる右の臂と離れてゐます。これは、一方が開くと一方の閉ぢる手風琴の動き方を思ひ起させる。

『この肩と臂との二重の平均は、全體としての靜かな優美に著しく貢献してゐるのです。

『今度は小像を側面から見事にしやう。

『それは後に傾いてゐる。脊は凹み込んで胸は僅かに張られてゐる。手短かに云へば像は中高で、C字形の形體を持つてゐる。

『この形體は像に光りを捕へる助けとなるのです。その光りはトルソーと四肢とに割り振られ、總體としてのチャームに加へる所があるのです。我々がこの小像に見る様な他と異つた特點は、殆んどすべての古代彫刻に見る事が出来るでせう。勿論無數の變化はある、又この土臺ともなる可き主點と幾分か違つたものもある、



けれども、君が希臘の作品を見る際には何時も私の差し示した様なこの特質を見出す事せう。

『次ぎにはこの技術的法式を心靈的部分へと入れて見るのです。すると君は、古代の藝術が安定や静けさや、秀美や平均、合理等を示してゐる事を認識する。』

——ロダンはその彫像に一瞥を投げて云つた。

『もう少しこれを先へ進ませる事も出来たが、それは私の實證に役立つのだから只我々を喜ばせる事に過ぎまい。且細部も極めて少し、か加へられなかつたらうし、それにつれて重要な眞實も同じ事になつてゐたらう。彫像の色々な面がこれと決めた決斷と知解』

とに依つて好く鹽梅され、それで全部は終るのです。つまり
あらゆる効果が得られたわけになる。それから後に精鍊を加へれ
ば見る人を喜ばせる事にはならうが、要するにそれは餘計な事
です。この面の技術はあらゆる大時代とも共通のもですが、今日
では殆んど顧みられてゐない。』

粘土の像を傍らに押しやつて氏は向ふへ行つた。

『今度はミケランジェロをやつて見やう。』

氏は全然初めの時のやり方を執らなかつた。氏は像の兩足を同じ